

くものいと No. 40

KUMO NO ITO

June 23, 2007

関西クモ研究会

くものいと No. 40 (June 2007)

- 石川県で秋末・初冬に見られるクモのバルーニング 徳本 洋 . . . 1
- 自宅（大阪府富田林市藤沢台）でワスレナグモのオス発見 第4報 田中穂積 . . . 17
- 自宅の庭でセアカゴケグモ発見 田中穂積 . . . 18
- ツツゲホウグモの雌，滋賀県で発見 田中穂積 . . . 19
- キシノウエトタテグモはどこから来て，どこへ行くのか 笹岡文雄 . . . 20
- 珍種発見記録 . . . 22
- [研究トレンド] ユウレイグモの雄と雌は交配中に会話する 榎元敏也 . . . 23
- 大阪城公園でヒトエグモを採集 清水裕行 . . . 24
- 龍谷の森のワクドツキジグモ (*Pasilobus hupingensis*) 吉田 真 . . . 26
- 関西クモ研究会 2006 年度例会の記録 . . . 31
- 利島改め伊豆大島旅行顛末記 原口 岳 . . . 35
- 大阪府のクモ 池田勇介 . . . 41
- 前回記事の訂正及び僕が大阪府内で確認したセアカゴケグモ採集記録 池田勇介 . . . 52
- 関西クモ研究会 2006 年度会計報告 . . . 53

くものいと 第40号

発行 2007年6月23日

関西クモ研究会

石川県で秋末・初冬に見られるクモのバルーニング

徳本 洋

クモがバルーニングと呼ばれる独特の移動法をもっていることはクモ研究者間ではよく知られているが、わが国でこの移動法がとくに秋末・初冬に目立つことや、これが東北地方の一部（山形県米沢盆地北東部）では「雪迎え」という詩情豊かな語で呼ばれていることが知られるようになったのは1939年ごろであったらしい。というのは、錦（1966）によると、それは朝日新聞1939年12月3日号学芸欄に載った歌人結城哀草果の随筆によって紹介されたというし、吉倉（1987）は佐藤（1939）が「雪迎え」を当時の生物学専門誌“植物と動物”上に紹介したと記しているからである。わが国ではとにかくそのころから、これに関心をもつ人が増えはじめたようで、山形県に在住した錦三郎がその地を中心としてこの現象をとくに詳しく研究し、それに関する多くの著書、報文を残した（錦, 1958; 1964; 1966; 1972; 1975a; 1975b; 1978; 1986, ほか多数）。錦がバルーニングを確認したクモの種数は40種と多く、調査の幅が広いばかりでなく、文化的視野からのアプローチもあり、その著作は日本エッセイストクラブ賞、サンケイ児童出版文化賞、斉藤茂吉文化賞ほか多くの賞を受けた。その温かい香りある文が日本国内の多くの一般の人びとや児童たちにクモの生活の一端を溶け込ませた功績は大きく、今日では、季節の風物詩としてしばしばこの言葉が報道面にも登場するようになってきている。ところが、このようにしてスポットライトを当てられたわが国の秋末・初冬に見られるクモのバルーニング現象があまりにも周知の現象になったためか、その後は散発的にいくつかの報告が出たものの、未知の部分はまだ多く残したまま、今に至っている。

また、錦の諸報告はクモ類の中にバルーニングが多く観察されるグループとそうでないグループがあることを明らかにし、当時のわが国におけるこの分野に大きな発展をもたらしたが、数量的記録がほとんどないため、バルーニングの季節特性の様相などが今ひとつはっきりしない。また同じ理由からであるが、その米沢盆地での観察記録をもとにして、日本国内でのバルーニングの様相に地域的な違いがあるのかないのか、あるとすればどう違うのかを調べようとしてもそれがむずかしい。そこで本報においては、これらの問題点を解明するために、取り上げる対象を私が住む石川県内の水田地帯における秋末・初冬期のバルーニングに限定し、手元にあるフィールド情報を整理し、この時季のクモのバルーニング特性を検討してみたい。

I 石川県内において秋末・初冬期に見られたクモのバルーニング関連事例

まず、石川県内において秋末・初冬に観察されたクモのバルーニングおよびそれと密接に関連していると考えられる現象の実例を観察例 (A1, A2, …) とし、て列挙する (表 1)。ついでこれらについて考察するのに参考になると考えられる日本国内でのクモに関する調査例 (石川県内も含む) を参考事例 (B1, B2, …) とし、て列挙する。

(1) 観察例

A1. (徳本, 1995; 種名などの一部を改変)

1994 年 11 月 24 日 12 時～12 時 15 分。石川県石川郡川北町朝日(標準地域メッシュコードは 5436-5451。以下同じ)農道橋。晴天, 風おだやか (無風に近いものをさす; 以下同じ)。気温 12.3℃。

この地点は金沢平野の中央部で, 海岸から 2km, 標高 8m, あたりは一面の水田地帯である。その農道につけられている長さ 10m ほどの小さな橋を通りかかったとき, 橋のらんかんの上に小さなクモが多数いるのに気づいた。目に付いた個体をすべて採集した (表 1)。

A2 (徳本, 1995; 種名などの一部を改変)

1994 年 11 月 24 日 12 時 30 分～13 時。石川県石川郡川北町下田子島(5436-5451)農道。晴天, 風おだやか。気温 12.5℃。

観察例 A1 の農道橋から 2km ほど離れた場所。海岸から 4.5km, 標高 8m。広い水田地帯の真ただ中である。農道縁の草の上端部に静止しているクモ個体が多く見られたので 30 分間スウィーピング採集 (表 1)。

A3 (徳本, 2002)

2001 年 11 月 25 日 11 時～12 時。石川県金沢市大場町柳瀬川つつみ公園(5436-7553)。晴天, 風穏やか, 気温 17℃。

この地点は金沢平野の海岸に近い水田地帯で標高 3m, 海跡湖である河北潟のすぐ近くである。そこを流れる小河川沿いに作られた小公園内にある吹き抜け構造の小さい休憩小屋 2 棟の柱表面に多数いたクモを採集 (表 1)。これらの個体はバルーニングによって飛来したもので, 小屋周辺の草地などから這い上がってきたものでないと判断した理由については原報中に説明してある。この後, 風が強くなるとクモの飛来がやんだ。

A4

2006 年 11 月 24 日 12 時～13 時。石川県羽咋市 (はくいし) 邑知潟 (おうちがた) 南岸(5536-3605) 農道。晴天, 風おだやか。気温 12.1℃。

あたり一面が水田地帯で標高 3m。農道縁の草や棒の高い位置, 稲刈り後の水田の“二番穂”を生じたイネ切り株の上に多くのクモが見られたので見つけ採り採集 (表 1)。二番穂というのは, 稲刈り取り後の切り株から新たに生じた背丈の

ごく低い葉および穂に対する通称である。石川県は早稲栽培が盛んなので、8月中旬から稲刈りが始まる。しかも気候の関係で二毛作があまりおこなわれないから、秋末になると二番穂がかなり成長しており、未熟結実にいたるものも多い。

これらのクモ個体を採集するとき、その下方の地表にいた *Pardosa astrigera* (L. Koch 1878) ウツキコモリグモ 6♀y8♂y を採集した。これらの中にはイネ切り株の地表にごく近い部分にいた個体もあるが、草や二番穂の高い部分にまで上がっている個体はなかった。

A5

2005年12月4日10時30分～10時40分。石川県河北郡津幡町字湯端(5436-7576)、水田地帯。穏やかな晴天。

この日おこなわれた河北潟湖沼研究所主催の河北潟自然観察会の参加者全員が次のことを観察、体験した。筆者は参加していない。場所は河北潟(観察例A3参照)の東部承水路にかかる湖南大橋の南東側に位置する水田地帯で、標高1.6m、水田一面にあるイネの切り株のすべてに前記した“二番穂”が生じており、その

表1. バルーニング観察例(A1～A4:詳しくは本文参照)における種別個体数.

()内は%.

種名	A1	A2	A3	A4
セシアカムネグモ	43♀50♂ (79.5)	20♀23♂ (64.2)	27♀30♂ (89.0)	27♀15♂ (85.7)
ニセアカムネグモ	1♀7♂ (6.8)		2♀ (3.0)	
ダイセツテナグモ	1♀ (0.9)			
カワリノキリグモ	2♂ (1.7)			
ノキリヒザグモ				4♀ (8.2)
ヨツボシヒメアシナガグモ	1y (0.9)			
トガリアシナガグモ			1y (1.6)	
アシナガグモ属の一種 (灰色)		2y (3.0)	1y (1.6)	2y (4.1)

アシナグモ属の一種 (緑色)				1y (2.0)
コガネグモ属の一種				1y (1.6)
ナカムラオニグモ				1♂ (1.6)
カイゾクモリグモ属の一種				1y (1.5)
オトヨウグモ属の一種	6y (5.1)	10y (16.4)		
ヤミロコニグモ属の一種	1y (1.5)		1y (1.6)	
ヤハズハエトリ	3♀y6♂y (13.4)			
同定不能	6y (5.1)			
採集個体数	117 (100.0)	66 (100.0)	64 (100.0)	49 (100.0)

葉や穂の間に作られたうすい白いクモの糸による幕が水田一面に広がり、逆光に輝いていて、その壮観に一同は目を奪われた。さらにそのとき、全員の頭に多数の微小なクモが飛来し、これにもとても驚いた。また二番穂および畦や農道に生えている背丈の低い草の上をよく見ると、たくさんの小さなクモがいて、周辺にクモの糸が多数かけられていた。また目がなれてくると写真の三脚や車の上、服の上、足下といたるところにクモがいるのに気づいた。一面に白くクモの糸の幕が張られた水田は、ここから解散場所である“こなん水辺公園”に至るまでの約3kmの距離の間でもあちこちに見られた。クモの一部を採集し当時、河北潟近辺に在住しておられた斉藤慎一郎氏に検していただいたところ、セスジアカムネグモほか2種とのことであった。この日は午後になると急に天候が崩れ、吹雪になった。まさに“雪迎え”の言葉どおりの実例に遭遇したことになり、今思い起こしても印象的な行事であった。(以上、観察会記録(河北潟湖沼研究所, 2005)ならびに参加者からの聞き取りによる)。

A6.

徳本は石川県白山市笠間町にある金城大学キャンパス内(5436-6402; 標高35m)で2003, 2004, 2005の毎年11月中・下旬にキャンパス内の草地・低木の

茎葉・枝葉間にクモの徘徊跡の糸が異常に多く、目立つ日がときどきあるのを観察した。日時、気温の記録はないが、それは必ず晴天で風のおだやかな日であり、午前中のことが多かった。このキャンパスは金沢平野の中央部にあって海岸から 2 km 内陸側にあり、周辺は広い水田地帯である。

(2) 参考事例

B1.

徳本(1976)は 1975 年 11 月 6 日、能登半島最先端部にある石川県珠洲市蛸島町地内(5637-1235; 標高 5m)の水田地帯にある標準的二百歩田(661 平方メートル、乾田)のイネ刈跡で調べたところ、任意抽出したイネ刈株 28 株中につきセスジアカムネグモが 0~3 個体、平均 1.04 個体が生息し、同水田(株数 13,250)1 枚にこのクモが 9,000 から 18,000 個体生息することが推定された(信頼度 95%で計算)。

B2.

徳本は 1982 年 12 月 5 日、石川県能美市辰口町大口(水田 A, B, C; 5436-5427; 標高 140m)および辰口町岩本(水田 D; 5436-5439; 標高 90m)、辰口町金剛寺(水田 E; 5436-5415; 標高 60m)においてイネ刈り株の中にある越冬個体を見つけ採りしたところ次のようであった。いずれも丘陵地帯の谷あいにつくられた水田で、水田 E 以外は調査したイネ株数を記録していない。

水田 a

Gnathonarium exsiccatum ニセアカムネグモ 5♀2♂

水田 b

Gnathonarium exsiccatum ニセアカムネグモ 9♀1♀y4♂2♂y

水田 c

Gnathonarium exsiccatum ニセアカムネグモ 1♀1♂

Pachygnatha clercki アゴブトグモ 1♂

水田 d

Gnathonarium exsiccatum ニセアカムネグモ 1♀

水田 e イネ 18 株

Ummeliata insectipes セスジアカムネグモ 4♀1♂

B3.

大熊(1975)は 1973 年 6 月 1 日~9 月 18 日の間に福岡県立農業試験場の水田にセットした地上 10m のトラップネットで捕獲されたクモを報じているが、その全体の 59.3% がコサラグモ類であったとしている。中でも種名判明種としてノコギリヒザグモ、ニセアカムネグモ、セスジアカムネグモをあげているが、もっとも多いのがニセアカムネグモで、セスジアカムネグモはもっとも少ない種となっている。

B4.

八木沼(1958)は1958年11月15日7時30分—10時(快晴, 気温は15℃, 微風), 三重県桑名郡多度町立中学校校庭(現桑名市多度町)で遊糸に乗って飛んでいるクモ多数を生物クラブ員が採集したものを同定し, そのリストを記している。8種であるが多数のセスジアカムネグモ以外はすべてきわめて小さい幼体で, またすべてが水田性種であると述べている。

B5.

錦(1975)は上記参考事例B4の前年1957年11月に同じ多度津中学校にクモの糸が降り, 同じ現象が北は岐阜県海津郡南濃町境地区, 南は多度町野代地区までの直径4kmの範囲にみられた, と記している。

B6.

徳本は2001年11月14日, NHK富山放送局某カメラマン氏から富山平野で撮影した「雪迎え」と思われるものをテレビカメラで撮影したビデオテープと, それが雪迎えであるかどうかの判定およびこれについてのいろいろなコメントをほしいという依頼とを受けとった。同カメラマン氏によると日本蜘蛛学会会長(当時)吉田真先生にお願いしたところ, 金沢市在住の筆者の方が富山に近いし, 雪迎えについての知見も多くもっているだろうから筆者に依頼するようにといわれたということであった。また同カメラマン氏は稲刈り跡の水田で株から株にかけて一面におおわれた銀色に輝く薄い糸膜の壮観に感激し, さっそく撮影してその正体を調べたところ, クモによる「雪迎え」現象であるらしいと判ったともいう。筆者はその映像を見た所見と, この現象の本体についての解説を詳しくメールで送り, 間違いなく雪迎えに関連する現象であることと, 撮影上の留意点を述べて, 再撮影の機会を作るように伝えたが, その後, どうなったかは知らない。

II 考察

(1) 秋末・初冬のバルーニングの特性

東北地方の人々がいう「雪迎え」は, 錦の解説によると秋末・初冬に見られるクモのバルーニングで, その際に飛行するクモの体を空中に支えているクモ糸が細く輝く銀線に見えたり, からんで白い糸のかたまりとなったりして人目を惹く状態のものをさしている(錦, 1972)。クモの出糸突起から出て空中に流された糸がこのように白い糸のかたまりとならないでまっすぐに伸びているときは, それが遊糸の本来の形であるが, 一般的には人目にはつきにくい。したがって, それがからまってできた白い糸のかたまりや, そのようになっていない遊糸が人の目に付くときは, それよりもはるかに数多くの目立たぬ飛行をおこなっているクモが観察した人の周辺を飛行していると考えられる。

ところが, クモのバルーニングは秋末や初冬の時期だけに起こるものでない。

原始的なクモ類はもっぱら歩行によって移動,分散するが,進化したクモ類では一部の例外的なグループまたは種を除いて,大部分の種は卵からかえった子グモのときに歩行とバルーニングとによって分散する。また,バルーニングをおこなう頻度は種によっても違いがあるであろうが,まどいに続く分散期以後でも体が小さい間や,成体自体が小さい種では成体時でもバルーニングによる空中飛行をおこなうと思われる。錦(1972)も年間を通した観察によってバルーニングは夏には少ないが春から秋にかけて観察され,冬でも陽光がさして温暖なとき,越冬箇所から出てきた個体がバルーニング準備体勢をとることがあるのを観察している。また大熊(1975)は,「バルーニング個体として認識される個体群の中には,物体間に糸を張り渡し,それを伝わって移動する目的の作業,いわゆる bridging 行動中の個体がたまたま吹き上げられたりするような,クモにとっては不本意な飛行分散となった個体も野外ではしばしば含まれていると想像される」と述べている。そしてさらに「上昇気流に乗って遠くへ移動する個体だけでなく,空気の乱流,空気の垂直混合に乗ってごく狭い範囲で飛び立ったり,降りてきたりしている個体も多く存在するであろう」と記している。

これらのことを総合すると,季節による多い少ないはあるであろうが,冬季以外はほとんどの時期にバルーニングが起こっていると考えられる。それなのに,秋末・初冬という短い期間にこうした白い糸やそのかたまりが目立って多く見られ,草間やイネ切り株の間などに異常に多いクモの歩行糸が張り巡らされることが目立つということは,この時季には温暖季より高い密度でクモがバルーニングを行なっていることを示していると思われる。

(2)秋末・初冬にはバルーニング衝動が高まる

前記したようにバルーニング自体は温暖季の各時期におこなわれていると考えられるが,バルーニングをおこなうのに適した場所を探し求めて,クモが盛んに草の間などを歩き回ったことを示す徘徊糸があたり一面に著しく目立つという現象を,筆者は温暖季に見たことがない。まどいを解いた直後の初期幼体が分散の足場をもとめていっせいに集団をなして移動する様子は,さまざまなクモの種でよく見かけるし,そのときは前を進む個体の引いた糸を,後続の個体が次々とたどるため糸が太くなるので目立ちやすい。とくに早春の草木の葉が茂らず,見通しのよい時期にそのようにして作られた糸が目立つジグモの例はしばしば報告されている(南森,1990;桂,1975,1990;桂ほか,1991;船曳,2005)。ただ,これらはまどいを解いた直後の同一種,同一卵のうから孵化した幼体個体群の一斉移動である。したがって,バルーニング準備段階の徘徊行動による糸が目立つという点では両者とも同じであるが,秋末・初冬期の徘徊行動による糸が目立つことの方は種も種内血縁関係も異なるさまざまな個体からなるある地域のクモ個体群がいっせいにその行動を起こしていることによるという点でまったく異なっている

る。

ところが、このようなクモの徘徊痕跡を示す糸がきわめて高い密度に路傍の草などの間に一面に張り巡らされて目立つ日が、前記したように秋末・初冬期にときどきあり(観察例 A4, 5, 6, 参考事例 B6), そのときは草やイネの切り株, 棒などの先端に目をやると, 小型のクモ個体があちこちにいるのが目立ち, 数個体が茎などの上の1点に集まっていることもよくある。また明らかに飛来したクモが多数集まってみつかるともあるし(観察例 A1, A3), 多数のクモが飛来するのを直接観察できた例もある(観察例 A5, 参考事例 B4, B5)。そしてこれらの実例を観察した月日を見ると, 年や場所は異なっているがすべて11月中・下旬, 12月上旬であるし, さらにその時の気象条件はそろって晴天, 無風ないしは微風である。

ただ, 綿密な観察を数多く重ねた錦(1972)によるとうす曇りの風のない日もよく飛び立つというから, そのような天候もバルーニングに向けた条件の範囲として加えておくのが妥当であろう。

また, 参考事例 B6 で記したように, イネ刈り跡の水田に一面に白く輝くクモの糸幕が張り巡らされ, その見事さに驚いた人からこれについての問い合わせの電話が筆者にかかってくるのがときどきあるが, それもみなこの時期である。Comstock(1912)はその著 *The Spider Book* の p.216 に広い草地一面に逆光を受けて輝くクモの糸織りの様を “A sea of gossamer” と題して見事な写真で示している。このような光景はいつの時代, どここの場所でもカメラマンにとっては撮影意欲をそそられる好材料なのであろう。

以上のようなことから, 秋末・初冬のおだやかな晴天という気象条件がクモのバルーニング衝動を高め, その足場を求めてクモの徘徊行動を激しくしているものと考えられる。しかも観察例 A3 で見たように, 風が強くなるとバルーニングによるクモの飛来が停止するということは, バルーニングに必要な気象条件の一つはおだやかな微風程度までの風力であって, それより強い風力はバルーニングをかえって抑制することを示している。Richter(1975)は *Pardosa* 属数種の子グモで気温, 湿度, 風速を実験的に変えてクモの飛び立ち状況を調べているが, 風速が 3m/sec を超すと飛び立ち姿勢をとる個体なくなり, 風速を一定にした場合は湿度が低く, 気温が高いと飛び立ち姿勢をとる個体が多くなることを明らかにしている。また Wingerden & Vugts (1974) もコサラグモの一種 *Erigone artica* についての野外調査で, このクモの飛び立ちには風速が 3m/sec 以下であることが必要で, 地表間近から高さ 1 m までの間の気温差が大きいほど飛ぶクモが多いことを明らかにしている。これらの調査結果は前記した筆者の野外観察結果から得た秋末・初冬にバルーニング衝動が高くなるときの気象条件とよく適合している。

ところで、前記したように石川県内で観察されたバルーニングが盛んにおこっている事例は、すべて11月下旬～12月上旬の間に集中していた。しかし、それが突然にこの時期に盛んになるのか、それとももっと前の時期から徐々に高まってくるのか、また、いつから始まるのかという経過については石川県では今のところ不明である。なお、この時期の点について錦(1975a)が山形県米沢盆地白竜湖周辺の湿地帯でおこなった通年観察では、次のような記録を残している。

「さかんに飛び立つのは秋10月末から11月、それに12月の雪の降る前で、夏はほとんどまったく飛び立ちません」「(飛び立つクモが)春は3月末から4月はじめごろわずかに見られます」「春にはコモリグモの仲間のほかは飛び立つクモをみつけることはできませんでした」「やはりクモが空へ飛び立つのは晩秋の快晴無風の日の午前10時ごろから午後4時ごろまでとなります」「風のある寒い日でも枯れ草にのぼって糸をはきます。ただそういう日にはうまく飛び立てるクモが少ないだけです」。

つまり、秋末・初冬期がもっともバルーニングが目立つ時期であるという点では石川県の低地平野部も山形県の米沢盆地も同一であるが、秋末のバルーニング高密度発生期間は石川県での場合よりかなり早く始まっているのかもしれない。両地は緯度も標高もかなり異なるから、バルーニングにおいてもその時期のような生物季節的な観点は土地による違いがあつて当然なので、観察月日を添えた記録の蓄積が今後必要である。

(3)石川県の秋末・初冬期のバルーニングでの優占種はセスジアカムネグモ

筆者が石川県内でのクモのバルーニング観察例、参考事例として前記したケースはすべて水田地帯におけるものであるが、そこに記録されている種数は15種ほどである。石川県の水田から記録されているクモの種構成から考えても、15種という種数はこの期間のバルーニング種の実種数よりかなり少ないと思われる。しかし、前記した観察例(A1～A5)ではすべての観察例にセスジアカムネグモが含まれていて、その比率は64.2～89.0%、平均78.2%という高い値を示している(表1)。このことから、今後、この時期のバルーニング調査を重ねれば、種数はもっと増えるであろうが、セスジアカムネグモが突出して目立つ優占種であることがゆらぐことはないと考えられる。また、表1ではセスジアカムネグモに比べると個体数がぐんと少ないニセアカムネグモ、さらに少ないノコギリヒザグモが次いでいる。この2種は石川県の平野部水田では温暖季にセスジアカムネグモと共に広く分布している種であることが知られているので(富樫・高, 1988; 菊池, 2007)、秋末の水田地帯バルーニング種として出現することは当然であると考えられる。また、さらに少ない個体数のコサラグモ類としてダイセツテナグモ、カワリノコギリグモが表1に記されているが、これら2種の国内分布図(新海・安藤・谷川, 2006)によると、この両種は西日本には分布地が知られていな

いが、石川県が分布範囲として記録されても当然であると考えられる種である。

ところで表 1 を見ると、コサラグモ類が種数、個体数ともに多く、しかもそれらの個体がすべて成体であるのに対し、コサラグモ類以外の種はほとんど幼体ばかりであることが判る。このような違いが起こる理由にはコサラグモ類は体が小さく、年複数回の世代を繰り返す種が多い上に、秋末に成体となって冬を迎える種が多いことが関係しているに違いない。このことは生活史研究が進んでいるセスジアカムネグモではよく判っており、大阪府では本種が田植え後、水田に侵入し始めるころは生息密度もごく低く、各令が混じっているが、その後、生息密度が上昇するにつれて、成体の比率が高まってゆき、11 月にはほとんど成体ばかりとなることが知られている（田中穂積, 1975）。

また、田中・浜村（1968）は栃木県宇都宮市の水田で、水田内のクモを 2 年間調査しているが、イネ刈り取り後である 11 月のクモ生息個体数が水田 1 m²あたり 85 個体で、刈り取り前の最高生息密度 1 m²あたり 55 個体よりはるかに大きく、刈り取り後もクモの生息密度が上昇することが判ったという。その報文には刈り取り前の最高密度のときの種構成が示されていないが、11 月の分については種構成が詳しく記されている。それによると全クモ個体数の 85% がコサラグモ類となっているから、稲刈り取り後のクモの個体数増加は、そのほとんどがコサラグモ類によってもたらされていることが判る。浜村（1969）は田中・浜村（1968）を受けてさらに 1 年間調査を継続し、3 年間分をまとめた報告をおこなっているが、それには主要コサラグモ 3 種の生息密度の季節的消長を示すグラフが載せられており、11 月上旬にはそれぞれの種が年間最高密度になることが示されている。これらのことから秋末・初冬期の水田ではコサラグモ類の個体数はその年内の最高の生息密度に達することになり、しかもその大部分が成体で占められることになることがはっきり分る。このようにしてイネ収穫後の水田では秋末・初冬期にコサラグモ類の成体の生息密度がひじょうに高くなるのが、これらの種の分散行動を促進する原因となり、またこの時期のバルーニング個体群の種構成においてコサラグモ類がもっとも大きな比率を示す理由となってくるのであろう。

なお、石川県と宇都宮市とでは水田の主要コサラグモの種類は同じで、共にセスジアカムネグモ、ニセアカムネグモ、ノコギリヒザグモである。ただ、イネ栽培期間中を通じてもっとも生息密度の高い種は石川県ではセスジアカムネグモであり（菊池, 2006）、宇都宮市ではニセアカムネグモである（浜村, 1969）。このことが石川県の秋末・初冬期のバルーニング個体群でセスジアカムネグモが優占種となる原因となっていると考えられる。宇都宮市では秋末・初冬期のバルーニング種の調査がおこなわれていないため、確認されていないが、秋末期の水田内生息密度はニセアカムネグモが他の 2 種に比べて際立って高いことから、バルーニング個体もニセアカムネグモが優占しているのではないかと思われる。

(4) 秋末・初冬期の水田地帯バルーニング優占種の地域による違い

前の項で述べたように、秋末・初冬期の水田地帯におけるバルーニング個体群中の優占種または優占種となっていると推定される種を都道府県別に調べると、それが石川県のようにセスジアカムネグモである地域とセスジアカムネグモ以外の種である地域とがあることがわかる。そこで次にそれらの地域がどのように分布しているのかを検討してみたい。ただ、これをおこなうには、この時期の水田地帯でバルーニング個体数を調査した報告例は全国的にみてもごくわずかしかないという問題点を解決する必要がある。そのため、この時期の水田でクモの生息密度を調査した報告があれば、それをういてバルーニング状態を間接的に推測するという操作を加えて考察をおこなうことにする。

なお、地域という表現を広く解釈すると、都道府県別といったような地理的分布の他に平野部・山麓部といったような地形的分布も含まれる。しかし、地形的分布に関する資料はまだほとんど得られていない。

セスジアカムネグモはロシア、中国、ベトナム、台湾、韓国、日本と広く分布が知られており (Platnick, 2007)、わが国では北海道から沖縄県まで各都道府県から記録があって (新海・安藤・谷川, 2006)、普通種と考えられている。また本種は水田に生息する代表的クモの一つであることも多くの報告で知られているが、とくに本州の関東地方中央部から九州にかけては少なくとも秋末期には高い生息密度をもつ種であろうと考えられるので、その時期のバルーニングの主役となっているのではないかと思われる。しかし本州でも前項に記したように関東地方北部や日本海側では新潟県あたりから北になってくると、水田内での本種の位置はニセアカムネグモなど他のコサラグモの種に入れ替わるのではないかと思われるデータが出ているので、その状況を以下に記す。

北海道の水田でのクモの生息状況はまったく不明である。

秋田県では水田のコサラグモ類中の優占種はニセアカムネグモであるという (小山, 1972)。

山形県では錦 (1975) が山形県米沢盆地の北東部にある赤湯付近の泥炭性湿地を開拓して作られた水田地帯に残っている湿地をフィールドとしてクモ調査をおこない、その結果をまとめているが、水田そのものの調査をおこなったのではないと思われる。そしてそこで見出されたコサラグモ類5種について、たくさん見られる種はセスジアカムネグモとトガリアカムネグモであり、あまり見られない種はセムシアカムネグモであり、見られる頻度が多くも少なくもないものはノコギリヒザグモ、ズダカグモであるというように分けている。この資料からは山形県の一般的水田におけるコサラグモ類の分布密度を知ることはできないが、石川県や三重県の一般的水田のようにコサラグモ類ではセスジアカムネグモが他のコサラグモ類にくらべて目だって多いということにはなっていないようである。し

かし、はっきりしないので、この県の水田地帯における秋末・初冬期の生息クモ類調査が、バルーニング個体群調査の結果が出ることが望まれる。

栃木県では宇都宮市内の水田で秋末期にニセアカムネグモが優占種である（浜村, 1968）ことは前項に記した。

埼玉県では三田・南部(1962)が鴻巣町（現鴻巣市）にあった農林省関東東山農業試験場鴻巣試験地の水田で、秋遅くまで生息密度が高いクモ5種をあげており、その中にサラグモ類ではセスジアカムネグモだけが入っている。

神奈川県では山野・木戸（1975）が厚木市における水田のクモ類調査報告の中で、セスジアカムネグモは普遍的な種の一つであるとし、7月から1月にかけての個体数消長を記録している。池田（1992）は同県伊勢原市子易の無農薬・低農薬水田で4月～10月にクモの調査をおこない、そこでの構成種相が山野・木戸（1975）の記録とは大きく異なっていることを明らかにしている。とくに子易の水田で目立つのは、これまで水田の普通種と考えられてきて、また水田害虫の重要天敵として注目されてきたセスジアカムネグモの生息が見出せなかったことである。

新潟県では水沢（1987）が県産サラグモ科を報じた報文の中で、「ニセアカムネグモは全県的に分布し、水田、畑、雑地に多く、とくに水田には多産する」と記している。その一方で、「セスジアカムネグモは水田地帯の畦、雑地、畠に産するが、トガリアカムネグモより少ない」と記しているから、ニセアカムネグモが水田のコサラグモ類の中での優占種であることがわかる。雑地がどのような環境をさすのかはわかりづらい。

三重県では参考事例B4, B5に記したように現桑名市立多度中学校校庭に飛来したバルーニング個体群を調査した記録があり、八木沼（1958）がその個体群の優占種がセスジアカムネグモであったことを明らかにしている。多度町は三重県が愛知県、岐阜県と接する県境の町で、岐阜県から流れてくる揖斐川の横にある。そして同校はその揖斐川と養老山地との間に挟まれた平地の中にあり、周辺には水田や畑が多いから、これは水田地帯での調査であったことがわかる。またクモの糸が降った範囲には同町に隣接する岐阜県南濃町も含まれているから、三重県と岐阜県とがセスジアカムネグモがバルーニング優占種であることが直接記録された県ということになる。なお、三重県ではその後、橋本（1966, 1967）が水田のクモ相を調べており、冬季休閑田にはセスジアカムネグモがひじょうに多いことを明らかにしている。

大阪府では田中穂積（1975）が堺市の水田に生息するクモ類を調査し、セスジアカムネグモがこの地域の水田で生息密度が高いことを明らかにしている。

島根県では町田（1965）が春季休閑田にもセスジアカムネグモが多く生息していることを記している。ただ、このように越冬を終えたクモ個体数が多くても、

その後におこなわれる田植えのための耕起や代かきによってほとんどのクモ類が殺されてしまう(田中・浜村, 1968)ことも知られている。

徳島県では小林(1961a,b)が同県農業試験場の水田でセスジアカムネグモが高い生息密度を示し、イネ害虫に対するきわめて重要な天敵であることを明らかにし、これがわが国における水田内クモ研究を沸き起こさせる発端となった。

福岡県では大熊(1975)が前記参考事例 B3 に記したように福岡県農業試験場においてバルーニング個体を調査している。そして、当時は水田に多いクモとして知られていたセスジアカムネグモが少なかったことを記している。しかし、これは調査時期が 6~9 月なので水田内ではまだセスジアカムネグモが少ない時期にあたっており(浜村, 1969)、そのためかもしれない。また大熊(1977)では福岡市東区内の水田で 11・12 月に本種の水田内生息個体数が大きく増えたことが示されているので、秋末期にはこの地区でもセスジアカムネグモ個体数が増えている可能性がある。なお、田中幸一(1994)は九州筑後地方(福岡県西南部にあたる地域)の水田にはセスジアカムネグモがとくに多いと記しているから、九州でも秋末には本種の水田内個体数密度は高くなっているのが一般的でないかと思われる。

沖縄県には本種の分布記録があるが、生息密度などを記した記録はない。

以上をまとめると、情報が少ないので詳しくは判らないが、わが国では富山県と中関東を結ぶ線あたり以南が秋末・初冬期の水田における生息コサラグモ類の優占種がセスジアカムネグモであり、その地帯のバルーニング個体群中の優占種も本種である可能性が高い。それに対して新潟県、北関東を結ぶ線を含めてそれよりは北の地域はこの時期の水田におけるコサラグモ類の優占種がセスジアカムネグモ以外のコサラグモ類である可能性が高いと思われ、その地帯でのバルーニング個体群の優占種も水田内コサラグモ類の優占種が占めている可能性が高いと考えられる。そこで、これを一つの作業仮説として、今後、各地で秋末・初冬期の水田生息クモを調査したり、バルーニング状況の観察をおこなったりして、その結果を報告しあうようにすれば、この時期における水田地帯でのバルーニングの全国比較という新しい視野が開けるし、この仮説の当否も判明するであろう。

また、上記の仮説では秋末期水田でセスジアカムネグモが優占種であると一般的にかんがえられる地方でも、神奈川県での池田(1992)や石川県での徳本(参考事例 B2)のように本種が無生息ないしは低密度生息と思われる水田が存在する。また、福岡県福岡市で大熊(1977)が調べた水田もニセアカムネグモが優占しており、セスジアカムネグモが少ないものであった。このような水田が存在する地区の存在事例をもっと増やして、それが成立している理由を探求することもそれぞれの種の生息環境選択の内容を知るのに役立つであろう。ただこれらの作業を進めるには池田(1992)が指摘しているように、コサラグモ類は分類難度の

高いグループなので、この類の分類学の近年における進歩を取り入れ、慎重に進めることが必要である。

まとめ

1. 石川県内で見られた秋末・初冬期の水田地帯におけるバルーニングおよびそれに密接に関連すると考えられる現象の調査実例を詳しく記録した。
2. 石川県の秋末・初冬期の水田地帯におけるバルーニング個体群の最優占種はセスジアカムネグモで、本種がバルーニング個体群の中で占める個体数比は他種にくらべて突出して高く、しかもそのほとんどは成体である。そしてこのようになる理由について考察した。
3. 日本国内でセスジアカムネグモが秋末・初冬期の水田地帯で最優占バルーニング種となる可能性の高い地域はおおまかにいって中関東地方と富山県あたりを結ぶ線を含めてそれより南の地域であり、この線より北の地域では最優占バルーニング種がセスジアカムネグモ以外のコサラグモ類の種に替わる可能性が高い、という仮説を提出し、これを検証するための各地での観察実施を提唱した。
4. 上記仮説でセスジアカムネグモが秋末期の水田で優占すると考えられる地域でも、本種以外のコサラグモ類の種が優占する水田が存在する小地域が混在することがあり、このような型の水田の発見例をもっと増やして、それが成立した理由を探求することも今後の課題である。

謝辞

粗稿についていろいろチェックいただいた立命館大学吉田真教授、文献収集についてお世話になった四日市市の太田定浩氏、新潟県のコサラグモ分布について教示いただいた上越市の水沢正明氏にあつく謝意を表する。

文献

- Comstock, J. H. 1912. The spider book. pp. 721. Doubleday, Page & Co. New York.
- Duffey, E. 1956. Aerial dispersal in a known spider population. *J. Anim. Ecol.*, **25**: 85-111.
- 浜村徹三. 1969. 水田におけるクモ類個体群の季節的変動. *Acta Arachnol.* **22**(2): 40-50.
- 橋本理市. 1966. 冬季休閑田のクモ. *三重生物*, **16**: 44-45.
- 橋本理市. 1967. 水田のクモ相. *三重生物*, **17**: 32-35.
- 船曳和代. 2005. 昨年から今年にかけて印象に残ったクモ. *くものいと*, (38): 10-15.

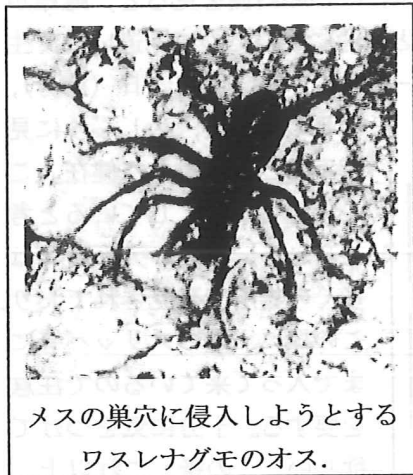
- 池田博明. 1992. 伊勢原市子易の水田のクモ相. *Atypus*, (64): 27-32.
- 桂孝次郎. 1975. ジグモの旅立ち. *Kishidaia*, (64): 6.
- 桂孝次郎・奥野晴三・韮公園自然探求グループ. 1991. 韮公園のジグモ—分布と子グモの旅立ち記録. *Nature Study*, 37(5): 5-8.
- 菊池知子. 2007. 石川県の水田の立地条件, 保全作業, 農法が節足動物群集に及ぼす影響. 金沢大学大学院自然科学研究科 2006 年度修士論文.
- 小林 尚. 1961a. ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布がウンカ・ヨコバイおよびクモ類の生息密度に及ぼす影響に関する研究. 病害虫発生予察特別報告, 6:1-126.
- 小林 尚. 1961b. ウンカ・ヨコバイ類の増殖とクモ類との関係. *Atypus*, (21): 1-3.
- 小山重郎. 1972. 秋田県の水田に棲息するクモ類. 北日本病虫研究, 23: 127.
- 町田明啓. 春季休閑田に生息するクモ類の種類と生息密度. 農薬, 12(4).
- 水沢正明. 1966. 北陸豪雪地における天敵クモの研究. 新潟県立松代高校. 文部省科奨金研究報告謄写印刷.
- 水沢正明. 1987. 新潟県産のサラグモ科(Linyphiidae). 新潟県生物研究会誌, (22): 47-55.
- 南森恵美子. 1990. クモの飛行の観察. *Nature Study*, 36(2): 16.
- 無名子. 2005. 第 45 回河北潟自然観察会記. かほくがた (河北潟湖沼研究所通信), 11(3): 1.
- 錦 三郎. 1958. クモの飛行. *Atypus*, (17): 18-20.
- 錦 三郎. 1964. 蜘蛛百態. pp. 188. 赤光発行所. 山形.
- 錦 三郎. 1966. クモの空中移動について—日本における gossamer (通称“雪迎え”) についての報告. *Acta Arachnol.*, 20(1): 24-34+pl.1-2.
- 錦 三郎. 1972. 飛行蜘蛛. pp. 191. 丸ノ内出版. 東京.
- 錦 三郎. 1975a. 空を飛ぶクモ. pp. 181. 学習研究社. 東京.
- 錦 三郎. 1975b. 雪迎え. pp. 181. 三省堂. 東京.
- 錦 三郎. 1978. 空を飛ぶクモの話. ラボ国際交流センター. 東京.
- 錦 三郎. 1986. クモの超能力. pp. 238. 講談社. 東京.
- 川原幸夫. 1975. コサラグモ類の個体群生態. 高知農林研究報, 7: 53-64.
- 大熊千代子. 1975. 水田上のトラップネットで捕獲されたクモ. *Atypus*, 63: 3-4.
- 大熊千代子. 1977. 福岡市津屋の水田地帯に生息するクモ類の発消長に関する研究. 九大農学芸誌, 31(4):133-144.
- Platnick, N. I. 2007. The World Spider Catalog, Ver. 7.5.
<http://research.amnh.org/entomology/spiders/catalog/index.html>

- Richter, C. J. J. 1970. Aerial dispersal in relation to habitat in eight wolf spider species (Pardosa, Araneae, Lycosidae). *Oecologia*, 5: 200-214.
- 三田久男・南部敏明. 1962. 秋期水田に棲息するクモ類についての2, 3の観察. 関東東山病害虫研究会年報, 9: 56.
- 佐藤隼夫. 1939. “雪迎ひ”と gossamer. 植物及動物, 7: 593-597.
- 新海明・近藤明久・谷川明男. 県別クモ類分布図. Ver. 2006. CD-R.
- 菅谷貞男. 1940. 遊糸を見るの記. 植物及動物, 8: 610-611.
- 田中穂積. 1975. 近畿における水田に生息するクモ類の生態学的研究(II)セスジアカムネグモおよびヤマトコノハグモの生活史について. *Acta Arachnol.*, 26(2): 51-57.
- 田中幸一. 1994. 水田に見られる害虫とクモ. 蜘蛛, (27): 23-24.
- 田中正・浜村徹三. 1968. 冬季休閑田におけるクモ類の生息密度. 宇都宮大学農学部学術報告, 7: 73-79.
- 富樫一次・高順一郎. 1988. 石川県における水田のクモ相. *Acta Arachnol.*, 36(2): 121-131.
- 徳本 洋. 1976. クモ類. 珠洲市史, 1: 394-400. 石川県珠洲市.
- 徳本 洋. 1995. その他の動物. 川北町の自然環境. 川北町史第1巻, 287-305. 石川県川北町.
- 徳本 洋. 2002. 水田近くでパルーニングしてきたクモ. くものいと, (31): 4-8
- Wingerden, W.K.R.E. van & Vugts, H.F. 1974. Factors influencing aeronautic behaviour of spiders. *Bull. Brit. Arch. Soc.*, 3: 6-10.
- 八木沼健夫. 1958. 糸にのって飛んだクモ. *Atypus*, (17): 8.
- 八木沼健夫. 1986. 原色日本クモ類図鑑. pp. 保育社. 大阪.
- 山野忠清・木戸哲二. 1975. 厚木市の水田におけるクモ類とその季節的消長. *Atypus*, 64: 27-34.
- 吉倉 眞. 1987. クモの生物学. pp. 613. 学会出版センター. 東京.

自宅（大阪府富田林市藤沢台）でワスレナグモのオス発見 第4報

田中 穂積

昨年（2006年）、日本蜘蛛学会第38回大会が東京国分寺市で開催された。その折に、ワスレナグモの飼育観察をされて来た梅林力さんに、自宅の庭で観察している個体についての行動など、疑問点を聞いてみた。私の自宅の個体は穴の入口の直径が1cm近くになるものもあり、十分成体と考えられるが、いっこうにオスを発見することが出来ない。どうなっているのだろうか？それに対して、梅林さんの飼育観察では、成体オスはメスの穴の入口に近寄り、入ったり出たりする行動を観察したことがあると言う。大会も終わり、上記のような話が頭にあり、ワスレナグモの巣穴が気になっていたので、8月29日（晴れ）の朝9時頃に巣穴に近づいてみると、何か入口に黒い物体が・・・まさか、オスが！！さらに近づい



メスの巣穴に侵入しようとする
ワスレナグモのオス。

数分で戻ってみると、穴から出て来るところだった。ということは、一度中に入りすぐに出て来たことになる。梅林さんの観察された行動と一致している。その後、また前脚を動かし中に入るしぐさが見られた。その後、仕事の都合でその場を離れざるを得なかったが、このようなオスの行動を観察したので報告する。だれか、このようなオスの行動を詳

しく調査されたら面白いと思う。それにしても、広い場所でメスの巣穴を探し当てるのは至難の技のはずだ。多くのクモで、オスがいつの間にか、メスの網に来ているのをよく目にするが、ワスレナグモの場合はどうなっているのだろうか。これも、研究されたら面白いような気がする。

自宅の庭でセアカゴケグモ発見

田中 穂積

庭（富田林市藤沢台）で、ごちゃごちゃしている小物を整理している時（2007

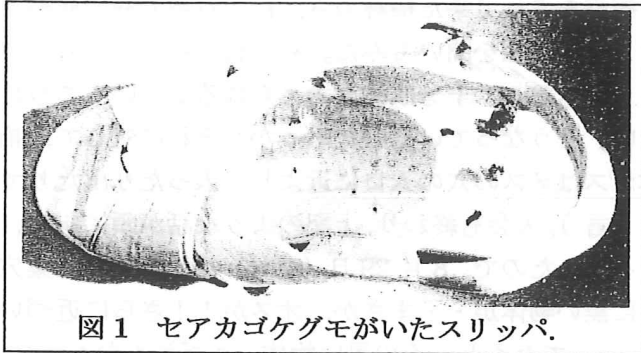


図1 セアカゴケグモがいたスリッパ.

年1月14日)、少しの間放置していたスリッパ(図1)があり、手にとって動かそうとし目を向けると、何かしら見慣れた網がスリッパに見られるではないか! そう!!セアカゴケグモの網!!注意しながらスリッパの内側を見ると、雌雄が

少し離れて生息いる(図2)。静かに、棒で触ると、共に動いたので間違いなく生

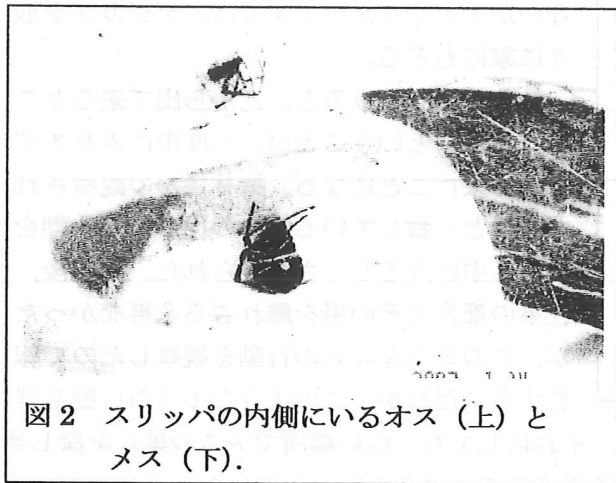


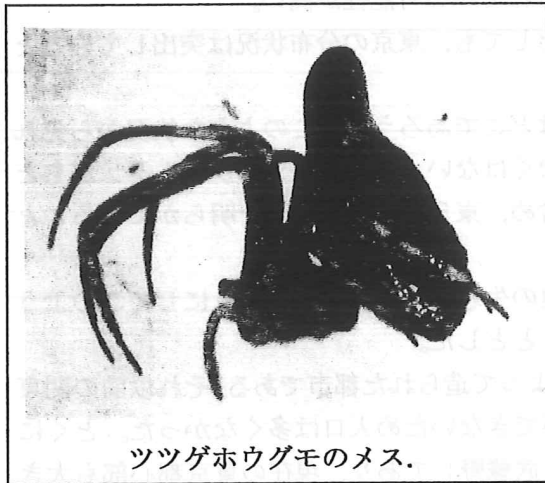
図2 スリッパの内側にいるオス(上)とメス(下).

きている。2月3日(節分)、昨日の雪の後、久しぶりに見てみると、雌雄共に健在。ここで越冬(?)していると考えられる。現在、大阪府では多くの場所で発見されており、この様に、庭のスリッパ等にまで入って来ているので注意を要する。十分に気をつけて欲しい。この後、これ以上、放置しておくのはあぶないのでアルコールに入れた。

ツツゲホウグモの雌、滋賀県で発見

田中 穂積

報告が少し古くなってしまふのだが、2004年の秋に、知人より送ってもらった滋賀県からの何個体かの標本を見る機会を得た。それらの標本を見ている中で、1個体、これは何？クモ？腹部先端が異様に飛び出している！まさに枯れ枝の先の様に。何十年間も、クモの標本を見て来たが、本当にこの時だけはびっくりした。以前、ゲホウグモは見たことがあったので、この仲間のクモだとは想像出来たが、ゲホウグモではない。腹部先端が、こんなに飛び出していない。すぐに、知人に詳しい採集地を確認し、さっそく採集に行ったけれども発見は出来なかった。その後、気になりながらも、そのままにしていたのだが、つい最近出版された、新海栄一さん(2006年)の図鑑を見ていて、びっくり。これだ！！私の標本は、ツツゲホウグモに違いない。さっそく、新海・安藤・谷川さん等(2006年)による、県別クモ類分布図で確認してみると、写真もそっくり、まちがいない。分布は九州(宮崎県)と南西諸島になっている。文献によると、南西諸島では、今までにいくらか採集されている。谷川さん(1989年)により、生殖器を確認。まず、本種と確信し、今回の発表に至った。ただ、分布が気になるのだが。



ツツゲホウグモのメス。

採集データ

採集個体：1雌

採集地：滋賀県野州町大篠原，林内

採集日：2004年7月28-29日

採集者：塚口茂彦

引用文献

新海明・安藤昭久・谷川明男，2006. 県別クモ類分布図 Ver. 2006, 著者自刊CD.

新海栄一，2006. ネイチャーガイド 日本のクモ. 文一総合出版.

谷川明男，1989. 西表島のクモ類採集記録 I. *Kishidaia*, (59) : 25-44.

キシノウエトタテグモはどこから来て、どこへ行くのか

笹岡 文雄

キシノウエトタテは東京ではもっとも採集しやすいクモの一つである。とくに23区内では生息数も多く(鈴木1992), (笹岡2007), また寿命が長く(笹岡1992), (牧私信) 四季を問わず各ステージの個体が生息していることから見つけることはさほど難しくはない。

しかしこのクモは環境省の絶滅危惧種に指定され、全国的には稀少とされている。確かに北関東(笹岡2006), 東北(笹岡2005)での分布は稀であり確認されている個体数も少ない。

西日本の知見は詳しくはないが、京都市内(平松私信)を除いて個体数が多い分布地は限られ、また広範囲にわたる分布地もないようである。

また東日本では都市部あるいは人為的環境以外における分布記録はほとんどなく、また都市部であっても内陸部からの報告は少ない。

ではなぜ東京区部に突出した数のクモが生息しているのであろうか。東京はその調査者が多いために、トタテグモ類の分布状況がもっとも明らかになっている地域であることも考えられる。また他の地域では土中性の種類であるキシノウエトタテの分布が、多くの調査で見逃されている可能性が高い。

しかしこのような条件を勘案したとしても、東京の分布状況は突出していると言ってよい。

そもそもキシノウエトタテの起源はどこであろうか。このような状況から見れば、東京が原産地と考える事もできなくはない。しかしキシノウエトタテがもともと東京に生息していたかどうかを含め、東日本の分布要因を明らかにすることは不可能に近い。

筆者は現在の東京及び東日本その他の生息環境から、どのようにしてこのような分布状況になったか推測してみることにした。

東京は17世紀初頭から徳川家康によって造られた都市である。それ以前の関東平野は水の手が悪く、大規模な耕作ができないため人口は多くなかった。とくに江戸周辺は当時草地と雑木の疎林の「武蔵野」であり、現在の東京都心部も大きな入江であった。このような環境ではキシノウエトタテの生息は稀であり、したがって恐らく当時の江戸にはほとんど生息していなかったのではないかと思われる。

むしろ家康の江戸入府により、拡大していった都市としての東京(江戸)にポイントがあるのではないか。江戸初期は家康の旧領三河を中心に家臣団、商人等も彼にしたがって入府している。その後幕府を開き、幕藩体制が確立すると各地

の大名の江戸住まいを義務づけたことは周知のことである。

大名が江戸に在勤するにあたり、一般的には上屋敷（公邸）、下屋敷（私邸）の2カ所、大大名であればそれらに加え、中屋敷など複数の居邸を持っていた。これらには必ず庭園が付属し、とくに私邸であった下屋敷の庭園は、大大名のものほど大きく豪華であったことは現在残されたもの（東京大学本郷校地：加賀前田家、小石川後樂園：水戸徳川家、六義園：郡山柳沢家など）からも判断される。

これらの庭園の造成にあたっては、木石など近場より調達することが基本であったようだが、施主（大名）の富と権力が大きいとわざわざ遠方より草木、庭石等を取り寄せ家もあった。

したがってどこかの庭園の造成のために移入された草木等について、キシノウエトタテが東京（江戸）に入り、定着出来たのではないかという推測が成り立つ。

さらにまた江戸という都市は市中に寺社や、現代でいう公園にあたる緑地が多くあり行楽地として整備されていたものも多かった（中村 1987）。また当然家康にしたがって入府した商人などの町人のため、居住地も新たに造成されている。

入江は周辺の台地を切り崩して早々に埋め立てられ、林は切り開かれて市中からは「武蔵野」の面影は消えていった。ただ現在の都市開発と違ってコンクリート等で地面を覆うことはなく、馬車を使うことがなかった江戸期の日本は、市中でさえ道が舗装されることもなかった。

そのような入り江、沼沢地、森林、草地の消失によって生まれた人工緑地や崖地、また地表面の露出はキシノウエトタテの生息環境として絶好のものであったろう。

しかしそのような環境が整ったとしても、歩行で分散するキシノウエトタテにとって、江戸市中（東京区部）全体に分布を拡げることが簡単だったとは考えがたい。むしろ一定以上の個体数がまとまって庭園などいくつもの場所に移入され、そこを拠点に市中に拡がったと考えると非常にわかりやすい。

そして江戸の都市構造は武家地、寺社地が比較的安定していてそれらについて大きな改変は行われていない。さらに明治末期にあっても旧大名家 11、大名家の敷地等を買取った実業家の庭園 15 等とまだかなりの大庭園が残されているのがわかる（中村 1987）。

したがって一端その庭園などにキシノウエトタテが定着すれば、かなり安定した生息場所になっていたのではないかと推測する。

また京都市の状況は精査していないが、寺社や公家邸宅の庭園の状況、都市の発達から考えると東京（江戸）と似た部分がありと考えられる。したがって京都市内に多いという状況に何ら違和感を覚えない。

キシノウエトタテの分布については、先に書いたように調査不足による未解明な部分が多い。また東日本では離島（伊豆大島）で初めて分布が確認されたが（笹

岡投稿中), その評価は必ずしも高くない。しかし歩行分散しかなない種 (鈴木私信), (牧私信), (笹岡未発表) がなぜ離島に分布するのか, 示唆するものは大きい。

その地域に分布しないことを証明することは非常に困難である以上, 分布している地域をより多く確認しその傾向を比較することが重要であり, そこにキシノウエトタテ分布解明の糸口があると思われる。

またDNAなど遺伝子レベルの解析を行えば, 国内において複数の系統が現れるかもしれない。もしあるとすれば各地の分布が人為であるということ補強するデータを得られるのではないかと思っている。

以上のことはあくまで推測にすぎないが, 未だにキシノウエトタテの原産はどこなのか, なぜ偏った分布を示しているのかは, 解明できない謎である。

謝辞

平松毅久氏には京都市におけるキシノウエトタテグモの状況について伺った。鈴木成生氏には幼体の分散について例示を, また牧孝匡氏にはキシノウエトタテの寿命と幼体の分散について例示とご示唆をいただいた。すべて本稿のためのものではないが, お三方には紙面を借りてお礼を申し上げたい。

参考文献

- 中村一 1987. 造園の歴史と文化. 養賢堂 (東京), 613pp.
- 笹岡文雄 1992. キシノウエトタテグモの寿命について. *Kishidaia*, 63:31.
- 笹岡文雄 2005. 東北地方におけるキシノウエトタテグモの分布. *Kishidaia* 87:39-48.
- 笹岡文雄 2006. 北関東3県 (群馬・栃木・茨城) におけるキシノウエトタテグモについて. *Kishidaia*, 89:39-42.
- 笹岡文雄 2007. 東京23区におけるキシノウエトタテグモの生息地点. *Kishidaia* 91:34-38.
- 笹岡文雄 2007. 伊豆大島のトタテグモ及びその他のクモ. *Kishidaia*, 92, 掲載予定.
- 鈴木成生 1992. 東京都心北部におけるキシノウエトタテグモの生息分布調査. *Kishidaia*, 63:1-6.

珍蛛発見記録

2007年4月21日, 滋賀県大津市大江町の龍谷の森で, 小池直樹君がカトウツケオグモ幼体2匹をビーティングでゲットした。彼は昨年9月にも龍谷大学瀬田キャンパスでカトウツケオグモ成メスを採集している。(文責: 吉田)

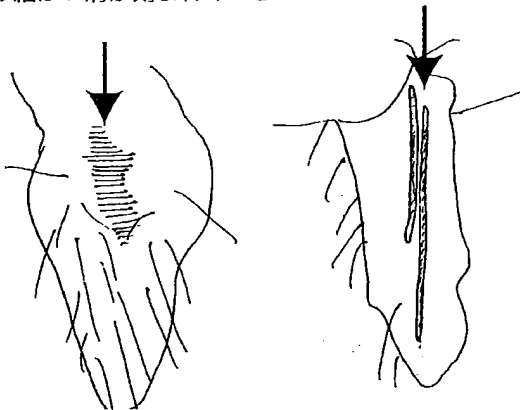
研究トレンド ユウレイグモの雄と雌は交接着中に会話する

榎元 敏也

交接着中に雌と雄が情報交換しているというのは従来から予想されていたが、実際に、どういう意味の情報をやりとりしているのかを調べた研究はなかった。

Perettiらは、これまでユウレイグモ科の *Physocyclus globosus* の配偶行動を研究してきた。このクモの場合、交接着の終了は雄が雌の外雌器から自らのパルプを抜くことによって終了する。多くの観察から、交接着中、雌が独特の音を発することがわかっている。下図のように、雌の缺角には複数の細かい溝が入っていて、これと雌のパルプの側面にある線状に盛り上がった部分が擦れることによって音が出るようになっている。

複数の細かい溝が刻まれている 線状に盛り上がっている



雌の缺角の側面

雌のパルプの側面

Perettiらは、顕微鏡下で配偶行動をビデオ撮影によって記録し、映像と音の分析を行ない、交接着中に雌が発するこの音が雄の配偶行動にどのような影響を及ぼすのか分析した。その結果、次の点が明らかになった。

- (1) 雌が音を発するのは、雄がパルプを挿入しているときであった。
- (2) 雄がパルプを挿入している時間が長かったり、雄が雌の出す音に反応せずにパルプの挿入を続けると、雌は音を発し続けた。
- (3) 雄がパルプの挿入をやめると雌は音を発するのをやめた。

実際、雌が音を発しないと、発音後 0.88 ± 0.61 秒後に交接着が終了するが、雌が音を発すると、発音後 0.67 ± 0.45 秒後に交接着が終了する。つまり、雌が音を発すると、雄は早く交接着を終了するのである。また、雌が無理矢理に雄を追い出すよ

うにして交接を終了することはない。

以上のことから、雌の出す音は雄のバルブの挿入を抑制する作用があることがわかった。

交接中、雄は雌の外雌器へ挿入したバルブをリズムカルに動かす。雄は雌の外雌器にバルブを挿入する行動を頻繁に行うほど、より多くの卵を受精することができた。しかし、本種の雄のバルブは大きく、交接によって雌の外雌器の一部を傷つけることがあり、雌にとっては長時間の交接は望ましくない。論文中に明確な理由が述べられていなかったのだが、面白いことに、雌の出す音にきちんと反応して交接を終了した雄の方が、そうでない雄よりも多くの卵を受精することができたそうである。

これまでは、交接前に雄がどのような求愛行動を行うか、雌がどのような反応を示すのかといった、交接前に起こる行動の研究が主であったが、この研究の結果から、交接中に交わされる雄と雌の「会話」も無視できないことが明らかになってきた。

参考文献

Peretti, A., W.G. Eberhard, R.D. Briceno. 2006. Copulatory dialogue: female spiders sing during copulation to influence male genitalic movements. *Anim. Behav.* 72: 413-421.

大阪城公園でヒトエグモを採集

清水 裕行

新年早々、注目種を採集できたので報告します。2007年1月25日に、大阪城公園（大阪市中央区）でクモと昆虫を採集してきました。追手門学院の創立120周年記念事業「大阪城プロジェクト」に協力した調査活動です。真冬だけあってさすがに収穫は少なく、落ち葉と樹皮を探って数種ずつ採集しただけでした。この中に意外な大物がありました。

外堀と内堀に挟まれた区画でアキニレの樹皮をめくったところ、平べったいくモが張り付いていました。一瞬、「アワセグモか？」と思いましたが、色が薄く、よりペツタリした感じでした。とりあえず採集びんに収めて持ち帰りました。顕微鏡下で精査すると、間違いなくヒトエグモの雄でした。私にとって本種の採集は初体験だったので興奮しました。

大阪府は、京都府と並んでヒトエグモの採集記録が多く、今回が5例目ではないかと思います。これまでに大阪市（東住吉区・旭区・東淀川区）と堺市の屋内

とか墓石の隙間などで見つかり、純然たる野外での採集は珍しいことと思われま。もつとも、現在では緑地ですが、往時は役所の建ち並んだ官庁街だったと思。いますから、建造物から進出した個体の子孫とも考えられます。

嬉しさの余り、大阪市立自然史博物館 (OMNH)で出会うナチュラリストに見せて回ると、皆さん一様に驚きます。「脱皮殻ではないんですね」「清水さんが誤ってつぶしたのではないの」といった反応がほとんどでした。昆虫屋さんにも関心の高いクモという。と、トリノフンダマシ類とカトウツケオグモで、とくに後者は「大阪市立自然史博物館友の会」の会誌『Nature Study』誌上にもしばしば採集報告が載りますが、ヒトエグモも故八木沼健夫先生が同誌上で紹介された大阪の顔のようなクモです。こちら。もブームになるかもしれません。

最後に、友の会会長でもある西川喜朗さんには標本を確認し、アドバイスもいただいたことを付け加えて、感謝の言葉に代えさせていただきます。

龍谷の森のワクドツキジグモ (*Pasilobus hupingensis*)

吉田 真

龍谷大学瀬田キャンパスに隣接する「龍谷の森」(滋賀県大津市瀬田大江町)で、ワクドツキジグモのオス成体(体長約2ミリ)が採集されていることが分かった



図1 ワクドツキジグモのオス成体

(図1)。採集日は2005年3月21日、採集者は当時立命館大学経済学部3回生だった社本吉正さんである。

ワクドツキジグモのような超稀少種がこの森に生息しているとは夢にも思わなかった私は、これをアカイロトリノフンダマシのオスと同定していたのだが、昨年末の関西クモ研究会の例会に出席していた谷川さんからワクドツキジグモのオスと指摘

されたのである。

ワクドツキジグモの学名は *Pasilobus bufoninus* Simon 1867 とされてきたが、谷



図2 オスの触肢

川さんは昨年、これが誤同定であり、ワクドツキジグモのメスの外雌器が中国で最近記載された *P. hupingensis* Yin, Bao & Kim 2001 のそれと一致することを明らかにした。彼はさらに DNA 分析によって、種が不明であった三重県産のトリフン系のオスがワクドツキジグモのオスであることを示した。このオスと形態的に同じ個体が、愛知県でも採集されている (Tanikawa et al. 2006)。龍谷の森で採集されたワクドツキジグモの触肢(図2)は、谷川さんの図とよく一致している。

昨年6月に大阪でワクドツキジグモのメス幼体が発見されており(杉山 2006)、オスが三重と愛知にいたのであれば、滋賀で見つかっても

少しもおかしくはない。ワクドツキジグモは九州と南西諸島だけでなく、本州にも生息しているのだ。この種は日本での採集が10回前後という希少種である(新海栄一 2006)。

それでは、ワクドツキジグモはこれからも滅多に採集されないクモなのである

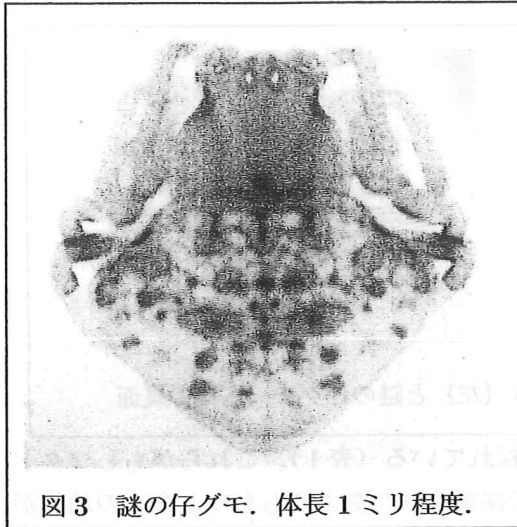


図3 謎の仔グモ. 体長1ミリ程度.

うか? 成体の採集はこれからも難しいだろう。狙って採集できるようなものではなさそうだ。しかし、幼体ならどうだろう? 幼体, とりわけ若令幼体はもっと生息密度が高いはずだから, 採集は成体よりたやすいだろう。龍谷の森では月一回の徹底的な採集がなされているから, 成体が採集されているなら, 幼体も採れていてもおかしくない。調べてみると, この森で怪しげなトリフン系の仔グモが採集されていた(図3)。この森には草地がほとんどなく, トリフン類が好む環境とはいえない。

採集されたのは, 体長1ミリ強の人面グモのような奴で, 腹部は京都のお公家様のような優しい顔に見える。ウロコ状の模様や突起がある。色は白っぽい, 黒

っぽい幼体もいる(図4)。



図4 黒化型の仔グモ. 体長1ミリ程度.

このクモとワクドツキジグモのオス成体を比較すると, 1) 眼の配列, 2) 頭胸部側面が暗色, 3) 腹部の形, 4) 腹部背面のウロコ模様の配置, が良く似ている。県別クモ類分布図のメスの写真(新海明ほか 2006)との比較でも, ウロコ模様の配置は似ている。しかし, オスと幼体の裏面は, 非常に似ているとは言えない(図5)。胸板が黒い点は共通しているが, 幼体の腹部下面が黒いのに対して, オス成体はそんなに黒くない。メ

ス成体との詳細な比較が望まれる。あるいは, 谷川さんがやったような DNA 分析でもいい。これがワクドツキジグモの幼体であるかどうかの確定が急がれる。

トリノフンダマシ, オオトリノフンダマシ, シロオビトリノフンダマシ, ムツトガイセキグモの幼体と比較したところでは, この幼体はそれらのどれでもないように見えた。アカイトトリノフンダマシでは, 幼体の標本を持っていなかった

ので成体と比較してみたが、アカイトリノフンダマシの成体の腹部には突起はなく、龍谷の森の幼体とは違っているように、筆者には思える。



図5 ワクドツキジグモオス成体(左)と謎の仔グモ(右)の裏面

この不明種幼体は、龍谷の森で19匹採れている(表1)。これらがもしワクドツキジグモなら、この種の成体が日本で採集された数よりもっと多くの幼体が

採集日	匹数	採集方法	採集者
2005.2.21	1	beating	社本吉正
2006.2.22	8	beating	社本吉正
2005.3.21	1	beat	社本吉正
2005.4.17	3	beating	社本吉正
2006.4.22	1	beating	小池直樹
2004.10.11	1	beating	社本吉正
2004.11.07	1	夜手取り	吉田真
2005.11.13	1	beating	社本吉正
2004.12.14	1	夜手取り	吉田真
2005.12.27	1	beating	社本吉正

採れていることになる。幼体は10月から4月の間に採れている。ほとんどがビーティングによるもので、夜の見つけ取りでも少数が採集されている。2006年2月22日にはビーティングで8匹も採れている！ 昼の見つけ取りやシフティングではまったく採れていない。つまり、この幼体を採集しようと思えば、秋から春にかけて雑木林でビーティングをすればいい。

5月から9月まで幼体が採れていないのはなぜであろうか？ それは、5月以降に密度が極端に減少したためと思われる。10月以降に採れた幼体は、秋に生まれた仔グモであろう。

2月18日の関西クモゼミでこの話をしたところ、池田勇介君が、生きた幼体を持っているという。2週間ほど前に、ワクドツキジグモのメス幼体が見つかった大阪府茨木市の竜王山に行き、隣の阿武山で採集したという。彼の話によればたくさんいるそうで、奈良でも採ったことがあるらしい(池田, 私信)。DNA分析のために、生きたまま谷川さんに送っていただくことにした。

2月12日の中部蜘蛛懇談会例会で僕の話をお聴いた須賀瑛文さんが、3月6日にクモの写真をメール添付で送ってきた。愛知県犬山市で2004年6月1日にピーティングで採集したものだという(図6)。体長は約2ミリで、龍谷の幼体の2倍

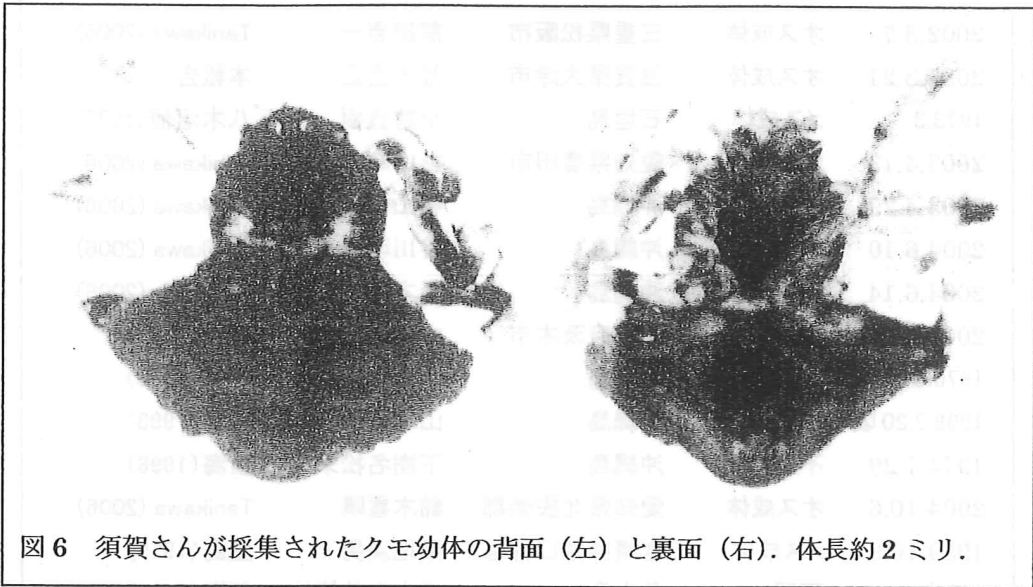


図6 須賀さんが採集されたクモ幼体の背面(左)と裏面(右)。体長約2ミリ。

ほど大きく、背面はこげ茶色である。腹部の形と背面のウロコ模様の配置は龍谷の幼体と同じであるが、模様は龍谷の幼体より大きい(図3参照)。腹部側後方の突起がはっきり見える(図4参照)。模様のサイズや配置はオス成体とよく似ている(図1参照)。胸板・腹部下面は真っ黒で、龍谷の幼体と似ている(図5参照)。つまりこの幼体は、龍谷の謎の幼体とワクドツキジグモのオス成体の中間の特徴を持っているのだ。採集地は丘陵地で、水気の少ない乾いた二次林だという。「一見、珍しい蜘蛛なんか見られないと思われるところ」というのが須賀さんの印象である(須賀, 私信)。龍谷の森も同様に、水気の少ない乾いた二次林である。

ワクドツキジグモのメスは溪流沿いで採れている(杉山, 2006; 谷川, 私信)。竜王山で採集した大西さんによれば、「サンショウウオが生息する舗装された林道沿いの林縁部で、広葉樹の葉の裏、地上から180cm程度のところにいた」という。ただし、龍谷の森でワクドツキジグモのオス成体が採れているから、溪流沿いでないと採集できないわけではない。

以下は、やや想像をたくましくして、謎の幼体がワクドツキジグモであると仮定して話を進めよう。表2は、日本でワクドツキジグモが採集された記録をまとめたものである。「不明」は雌雄や成体・幼体の区別が書いていない記録であるが、この種のオスは2006年に始めて確認されたものであるから、それ以前の記録にあるのは、メス成体または腹部が横に広がった「メス成体型」のメス幼体と思われる

る。

表2 ワクドツキジグモの採集記録

採集日	雌雄	採集地	採集者	文献
2002.3.7	オス成体	三重県松阪市	熊田憲一	Tanikawa (2006)
2005.3.21	オス成体	滋賀県大津市	社本吉正	本報告
1973.3	メス成体	石垣島	小倉直樹	八木沼他(1975)
2003.4.13	オス成体	愛知県豊田市	杉山時雄	Tanikawa (2006)
2003.4.29	メス成体	沖縄島	村山 望	Tanikawa (2006)
2004.6.10	メス成体	沖縄島	谷川明男	Tanikawa (2006)
2004.6.14	メス成体	沖縄島	杉本雅志	Tanikawa (2006)
2006.6.21	メス幼体	大阪府茨木市	大西敏一	杉山(2006)
1976.6	不明	沖縄島	千木良芳範他	新海(1998)
1998.7.20頃	不明	沖縄島	山本正英	新海(1998)
1974.7.29	不明	沖縄島	下謝名松栄	新海(1998)
2004.10.6	オス成体	愛知県北設楽郡	鈴木喜晴	Tanikawa (2006)
1959.10.9	メス成体	宮崎県東臼杵郡	築地満男	萱島(1959)
1991	不明	久米島	千木良芳範他	新海(1998)

これを見るとオス成体は3, 4, 10月に, メスは3, 4, 6, 10月に採集されている。表1と表2から, ワクドツキジグモの生活史を推測してみよう。沖縄は亜熱帯であり, 本州・九州とはかなり気候が違うので, ここではまず本州・九州での生活史を考えよう。10月にオス・メスともに成体が採れていること, および幼体が10月以降に採れていることから, この種の繁殖期は秋だと思われる。6月に大阪で, メス成体と似た体形の幼体が採れているから, これが秋に成体となるのであろう。つまり, 秋繁殖の年一化性と思われる。ただし, オス成体が3・4月に採集されているのは, この推測に合わない。春繁殖だとすると, 5月以降に幼体が採集されないのは不思議である。オス成体がなぜ春にいるのだろうか? メス成体がなぜ春に採集されていないのだろうか? この辺はまだ良く分からない。

沖縄では, メス成体が3月(石垣島), 4月(沖縄島), 6月(沖縄島)で採集されている。しかし, 筆者の知る限りでは, まだオスが採集されておらず, 幼体も採れていない。メス成体の出現期から見て春繁殖とも考えられるが, 生活史は良く分からないとしておく方が今のところ無難であろう。

ワクドツキジグモの幼体が確認され, 各地で採集されるようになれば, ワクドツキジグモの分布, 生息場所の特徴, 幼体の行動などが分かっていくに違いない。

そしてもっと多くの成体が採集されるようになるだろう。さらに、ツシマトリノフンダマシやサカグチトリノフンダマシのような希少種にも、同じような方法が使えるかもしれない。夢はますます広がっていくが、謎の幼体がアカイロトリノフンダマシなどであることが分かったら、これは単なる妄想となる(笑)。谷川さんのDNA分析がうまくいけば、結果はそのうちに分かるだろう。

ワクドツキジグモのオスを別の種に同定していた私の誤りを指摘して下さった東京大学の谷川明男氏、龍谷の森でワクドツキジグモのオス成体と謎の幼体を採集してくれた社本吉正氏、謎の幼体を採集してくれた小池直樹氏、写真を提供していただいた須賀瑛文氏、貴重な情報を教えていただいた新海明さん、池田幸二氏と勇介君に深く感謝する。

引用文献

- Tanikawa, A., Chang Y. & I. Tso. 2006. Identity of a Japanese spider recorded as *Pasilobus bufoninus*? (Araneae: Araneidae), with a description of the sequence of mtDNA. *Acta Arachnol.*, **55**(1): 45-49.
- 杉山時雄 2006. 速報: ワクドツキジグモが まどい, 41:8.
- 新海栄一. 2006. ネイチャーガイド「日本のクモ」. 336 p. 文一総合出版.
- 新海明・安藤昭久・谷川明男. 2006. 県別クモ類分布図 Ver. 2006. (CD)
- 新海明. 1998. 沖縄県での珍蛛の採集記録. *Kishidaia*, **73**: 28.
- 萱島 泉 1959. *Pasilobus bufoninus* は日本にもいる. *Atypus*, **18**: 11.
- 八木沼健夫・新海栄一 1975. 分布資料. *Atypus*, **63**: 31

関西クモ研究会 2006 年度例会の記録

2006年12月23日(土)に四天王寺高等学校(大阪市天王寺区)で2006年度の例会が開催された。

役員会 例会に先立って、役員会が開かれた。出席者: 山野忠清(会長), 吉田真(編集), 加村隆英(庶務・会計), 西川喜朗(顧問), 田中穂積(会計監査)。

(1) 2007 年度の行事予定

- ・採集会: 2007年5月27日(日)および2007年9月23日(日), いずれも京都市嵐山方面を予定。
- ・例会: 2007年12月23日(日), 場所は未定。

(2) 「くものいと」の発行

39号を2006年9月に発行した。40号を2006年度中に発行したいが、原稿集めに苦慮している。

(3) 庶務報告

現在の会員数は82名。

(4) 次期役員候補の選出

現在の役員の任期が2006年度末(2007年3月31日)で終了するため、次期(2007・2008年度)の役員について検討し、以下のような候補を選出した。

会長：田中穂積，編集：吉田 真，庶務：山野忠清，会計(名簿管理を合わせて担当)：加村隆英，会計監査：船曳和代，顧問：西川喜朗。

例会

出席者：赤松史憲，浅川 正，荒川真子，池田幸二，池田勇介，大崎茂芳，金澤博行，加村隆英，黒田あき，小池直樹，小池牧子，座古禎三，清水裕行，新海 明，関根幹夫，田中穂積，谷川明男，徳本 洋，西川喜朗，原口 岳，平松毅久，船曳和代，村上協三，山田廣士，山野忠清，吉田 真，渡辺昌造(計27名)。

講演発表

- (1) 関根幹夫：溪流上に造網するオオシロカネグモが水面への落下を避ける行動
- (2) 谷川明男：日本産ハシリグモ属の再見直し
- (3) 新海 明：「赤いハグモ」の正体は？
- (4) 平松毅久：日本産カラカラグモ科の未記載種について
- (5) 大崎茂芳：クモは命綱の力学的特性をどの程度使用しているか？
- (6) 清水裕行：「平成の大合併」と兵庫県産のクモ，セアカゴケグモの「ニュース」紹介
- (7) 徳本 洋：秋末の石川県で見られるバルーニング

なお、講演の合間に、役員会で審議・報告した内容を出席者に紹介し、了承を得た。

近況報告

平松毅久

初めて例会に参加しました。93年に三重県熊野市で採集したカラカラグモの一種を遅まきながら記載しようと準備しています。これが片付いたら西表島産の興味深い種についても記載したいのですが、初めてのことなのでまだまだ勉強することばかりです。カラカラグモ科は小さな分類群ながら網の種類も多様で非常に面白いグループですが、何せ体長が1~2mmと小さいためなかなか注目を集めることが少ないようです。

今回、関西でやはりカラカラグモに興味を持つ赤松氏と知り合えたことは収穫

でした。まだまだ未知の種が出そうで、一人でも多くの人に興味を持ってもらうべくチビグモ教(?)を広めるべくまた宣教師として来阪したいと思います。

清水裕行

2006年はゴケグモに明け、ゴケグモにくれた一年でした。一月には私が所属する「昆虫情報処理研究会」のサイトに「ゴケグモ情報センター」を開設。その管理人になりました。ご意見をお聞かせください。

<http://www.insbase.ac/koop52/modules/bwiki/>

夏には「あの毒グモはいま」的な報道番組の制作に協力して、その番組に池田勇介君とともに出演しました(9月7日に関西テレビ系「アンカー」で放映)。また12月16日に「兵庫県人と自然の博物館」で開催された日本昆虫学会と日本鱗翅学会共催の研究会で、「日本列島におけるゴケグモ属の分布」について発表しました(私はどちらの会員でもないので、西川喜朗さんと大阪市立自然史博物館の金沢至さんとの共同発表としました)。

池田勇介

今年で、関西クモ研究会に入会してから8年目になります。来年もクモ三昧の一年を過ごしたいと思います。

原口 岳

4回生進級(?)に向けて研究室が決まり(森林生態学研究室です)、サークルを引退したこともあって落ち着いた日々を過ごしています。これを機会にいつそう生態学とクモの世界の勉強に努めます。皆様どうぞよろしくお願ひします。

西川喜朗

関根さん、谷川さん、新海さん、平松さん、すばらしい発表ありがとうございました。大阪城公園での採集会、たくさん参加していただき、クモ相がかなり解明できそうです。来年も、大阪城のクモの昆虫調査に力をそそぎます。

新海 明

4, 5年ぶりに関西クモ研例会に参加しました。赤いハグモの正体を確定したいと思います。ヒナハグモの標本と生態情報を求めていますので、よろしくお願ひします。

関根幹夫

コスタリカを訪れる予定です。ビルヒリオ・ロドリゲス・アカル著「ケツアル

鳥の館」を読んで、幻の鳥ケツァールを撮りたいと思い、中米の熱帯雲霧林に行く予定です。もちろん、クモも珍しいものを見ることができれば・・・

浅川 正

12月に入会して即例会に出席させていただきました。発表は微に入り細に亘る同定の話が主のようで、やや閉口気味です。私はクモのことはほとんど何も知りませんが、少しずつ勉強していきたいと思っております。日本自然保護協会の自然観察指導員として、毎月一回箕面の山麓で観察会を行っております。どうぞよろしく願い申し上げます。

山田廣士

- ・ 9月末に会社（西宮）で見つけたアシダカグモのオスを自宅に放しました。元気に虫を捕らえているようですが、あまり顔を見ないです。その前につかまえて放した腹の大きなメス（会社事務所）はその後見かけないのですが、最近（11月中旬）に仔グモ（約1mm）を時々見ます。おそらくあのクモの子供かと思います。
- ・ ドアの間隙のクモの巣を掃除させられています（いろいろいるみたいです）。
- ・ 植木には、ジョロウグモが5頭ほど網を張っています。
- ・ 春にはナガコガネグモが3頭ほどいましたが、成虫になったところに植木（市の管理）が刈り取られていなくなっていました。
- ・ 溝を見ているのですが、セアカゴケグモは一度も見つかっていません。

徳本 洋

頭も体もがっくりボケてきて外へもあまり出られませんが、クモを眺めることが落下速度を緩めるブレーキとなることを期待して、会員活動を続けようと思っています。

2007・2008年度役員紹介

2006年度例会において、次期の役員が以下のように決まりました。

会長：田中穂積，編集：吉田 真，庶務：山野忠清，会計（名簿管理を合わせて担当）：加村隆英，会計監査：船曳和代，顧問：西川喜朗。

編集，会計，顧問は留任です。庶務は山野氏に交替しますが，名簿管理については会計の加村が引き続き担当しますので，入会申込や住所変更の連絡については加村宛にお知らせください。

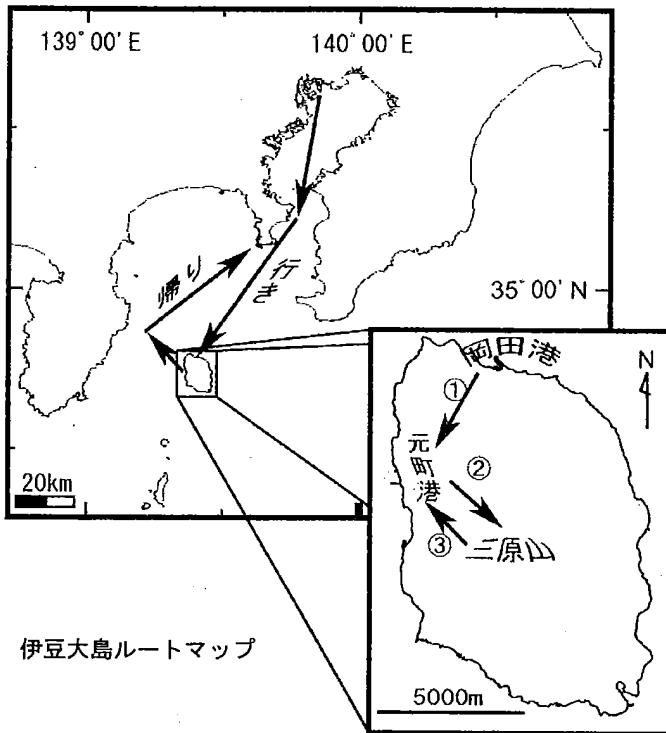
(2006年度庶務・会計担当 加村隆英)

利島改め伊豆大島旅行顛末記

原口 岳

関西クモの皆様におかれましては、日々ご活躍のことと拝察致します。私も(クモ同定はともかく)皆様に行動力では負けぬよう、日々精進させていただく所存であります。

さて今回は、大学の冬休み期間を利用して、伊豆大島にクモ採集に出掛けた折りの事を報告しようと筆を取りました。ただ、残念ながらクモの話はほとんど出てきません。当初の目的地・利島から行き先を変更したのに始まって、哀しいか



伊豆大島ルートマップ

な、旅はどんどん所期の目的を外れていきました。という訳で、ほんの隙間記事として御笑覧下されば幸いです。尚、採集の成果に関しては、Kishidaiaにて中條竜太氏が「冬の伊豆大島から採集されたクモ」のタイトルで記録して下さっていますので、そちらを参考になさってください。という訳で、この企画は、「Kishidaia」と「くものいと」のコラボレーションの試みでもあります。では始まり始まり…

旅立ち

1月3日である。中條さんのお膳立てで、本日から明日に掛けて利島でクモ採集をすべく、私は竹芝栈橋に向かっていった。周囲は正月ムードで楽しげにしている中、私はいつも通り赤いレインウェア着用の上、虫取り網の柄を右手に持って電車に乗りこんだ。これまたいつもの事だが、周囲の視線を感じる。都心のど真ん中でこの姿はさぞかし浮いているのだろう。まあ、そのような事は気にすまい。東京タワーを背にして港に向かう。

20時30分に港に到着するが、未だ誰も来ていない。一応集合時間通りにやってきたのだが。まあ京大時間に慣れた今の私がこれぐらいのことで動じるはずもなく、辺りをぶらぶらして待っていると、やがて中條氏(♂)と中西さん(♀)が到着した。御二人は東邦大学地理生態の院生・学生さんである。中條さんとは去年のクモ学会以来の再会だ。ぎこちない挨拶を済ませたのち、中條さんにいきなり、「何レンジャーにしますか?」と聞かれた。えーと、それはどういう意味だろう…。コスプレ?

何のことはない、標本ビンの採集者識別マークの色をどれにしたいかという話だった。アカレンジャーになることにして、サンプルビンを受け取る。ここで、行き先変更の打ち合わせをする。利島は波が少し荒いとすぐ着岸できなくなるような小さい港しかなく、今日着岸出来るかどうかは微妙な情勢なのだという。利島は伊豆諸島の中でクモ採集記録が極端に少ない上、珍品の採集記録がある島なので断念するのはやや残念だが、この時点で目的地を大島に切り替えることとなった。

さて、もう1人の旅の仲間を紹介しよう。私の中学時代の同級生にして慶応大学文学部(!)の久保真司氏(♂)である。家庭教師のバイトで最後の到着となった彼は、実は中條氏を私に引き合わせてくれた、この旅のキーマンである。中條氏とは高校の陸上部で知り合ったそうだ。世間は広いようで狭い。

さて、全員が揃ったところで乗船の運びと相成った。乗り込んだのは「かめりあ号」、決して「かめあり号」ではないのだが、東京都内という場所柄もあって、船の名前に脱力する。だいたい、船から見える景色はレインボーブリッジだとか幕張だとか、およそ採集に出掛けている雰囲気にならない。街を離れることをよしとする私はさっさと寝てしまった。他の♂2人は杯を傾けていたらしい。

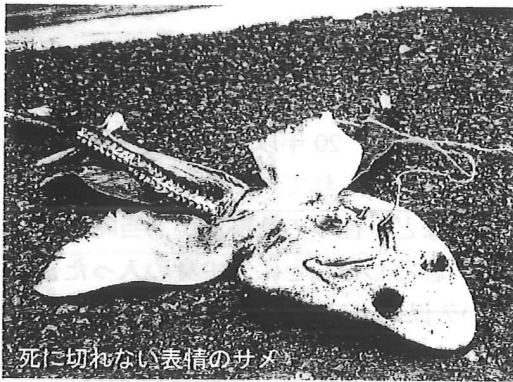
採集前編～岡田港周辺～

翌日(1月4日)は5時40分位に大島到着のアナウンスがあり、その音で目を覚ました。急いで下船の準備に掛かる。～10分後、下船した我々は岡田港の待合室にて軽食を取っていた。いよいよ採集に向けて臨戦態勢である。まずは、「どちらに行こうか?」という無計画な話し合いが行われ、まずは大島を北端から内陸の東よりに向かって歩いてみることに決まった。適当な時間に戻って来て、次の船が出港する大島西岸の港(大島元町港)の近くに移動し、大島の北と西を採集して歩こうというのがおおまかな段取りである。(大島に来たからには、西の港から程近い三原山も攻略せねばなるまいし、その分の時間を考えると、余った時間はそれ程ないだろう…というのが主なルート選択要因だったと思う。)海岸からの上り坂を歩きつつ、道端の枯野に踏み入っては石をひっくり返してまわる。ここでは、思いがけず久保氏(注:文学部)が大活躍する。ヤチグモなど、(サイズの意味で?)大物をゲットしていた。結構楽しんでくれている様子で一安心。

(しかし、大きなムカデに悲鳴を上げていた。可愛い!) 私はというと、どうしても小さいクモに目がいってしまうのか、如何にも幼体のような個体ばかり捕まえていた。

採集の成果は中條氏がしっかり報告してくれるとして、歩いていて気になったのは、伊豆大島のネコの多さである。基本的には伊豆大島の伝統的な産業は漁業であったろうし、道すがら魚のオカシラが落ちているのも見かけたから、猫が多いことがそれほど不思議なことではないのだが、それにしても三歩歩くと猫に当たるといった感じであった。そして、その後我々はネコの集合住宅を目にすることになる。

別にネコばかり見ていた訳ではなく、行きはしっかり採集して歩いたのだが、帰りは何だかのんびりとした雰囲気になってしまった。やはり、冬の採集はテンションを維持するのがなかなか難しいように感じる。しかし、それはそれでよいこともあって、行きには見落としていた神社を発見できた。ここでも勿論採集したのだが、その神社の神木であるらしい、「触ると乳が出るようになる」という



死に切れない表情のサメ

イチョウの木に(私を含めた) 2人で触りまくっていたことを付け加えておく。出るようになってどうするのだろうか? 主夫?

そんなこともありつつ帰りの道を辿っていくと、道端でマンガのようなサメの死体に出会う事が出来た。何がマンガか、と言えば、顔がマンガなのである。詳細は左の写真を参考にして欲しい。

採集後編～三原山～

いったん岡田港に戻り、そこからバスに乗って西岸の港(元町港)に向かう。バスでは、海沿いらしく「ぬれた衣服・水着・はだかでの乗車禁止」の文字が。

(裸で乗車したら、別の意味で問題では…) 観光案内で確認すると、元町港付近は比較的開けた場所であるようだ。ということは、港付近での採集はあまり期待できないし、採集していると怪しまれる可能性が大である、ということだ。到着してみれば、確かに街の雰囲気であり、私の虫取り網が所在無げである。しかし、負けてはなるまい。生垣に始まって、公衆電話のスミ、ちょっとした街路樹などをビーティングしつつ、三原山に向かう。ここでも、いくつかのトリビアルな発見があった。港を発つてすぐ目についたのは「赤門」の存在である。決して東大支部ではない。何でも源為朝氏が島流しにされた時に住んでいた所らしい。お次のネタは、(警察署の前を通り過ぎた時に気がついたことであるが) 大島は東京都

品川区であり、警視庁の管轄である、という事実。因みに、失礼ながら、とんでもない左遷の場所では…と考えてしまった。尚、伊豆諸島のナンバープレートも品川ナンバーであり、島内の品川ナンバー率は明らかに本州の品川区よりも高い。そしてそして、最も衝撃的だったのは、ネコ屋敷ならぬネコ自動車を見かけたこと。廃車寸前の軽乗用車の中にネコが4~5匹詰め込まれていたのである。エサもおいてあったので、あれは「飼われて」いるのだと思う。大島のネコ個体群密度の高さの一因を垣間見た気がする。POCHET(車種名)に詰め込まれたネコ、というのはよい土産話になった。



色々なネタを収集して、一体何をしにやって来たのかよく分からなくなったころ、道は急な登り坂になり、やや三原山に近づいた気配がしてきた。ここで、久保氏が(彼にとって)重大な発見をする。行く手に、20年以上前の飲み物(1981年の記念ボトルがあった)の空き瓶が多数積み上げられていたのである。ざっと見たところ、コーラ、ファンタ、スプライトなど、往年の飲料達が、当時の面影をそのままに木箱に入って放置されている。恐ろしいことに、中身の入ったままのものもある。近現代史で卒論を書くらしい久保氏にはその価値が分かるらしく、(というか、そういったものが売れる市場を知っているらしく)しばらくその場で写真撮影した挙句に、帰りがけには、その重いビンを何本か持ち帰っていた。私としては、その隣にあったピアノ鍵盤型電卓の方が気に入っていた(スピーカー付! 計算の度に音がするの?)のだが、その意味では私も彼と同類なのだろう。因みに、この後道は壺園につながっていたが、そこでも久保氏はなにやらメモを取っていた。研究熱心な人だ。



話はすっかり脇に逸れたが、それにはそれなりに理由がある。三原山は1984年に噴火したことで有名だが、それはすなわち、土壌の堆積がその時点でリセットされたということであり、従って土壌が薄いのである。そのせいかどうか、体感的にはかなりクモが少なく、その代わりダニが多かった。その意味では、三原



山の「溶岩流が見られる」ルートを選択したことは最悪のチョイスであった訳だが、今更悔やんでも仕方あるまい。おまけに、地図上では水流があるらしき場所に行くと、そこは三面護岸で尚且つ水がほとんど流れていなかった。よって水場にいるようなクモですら、採集の見込みは絶たれてしまったのである。哀しい気

分ではあったが、護岸された所にやってきていたヤマガラが若干気を紛らわせてくれた(上図)。

それでも、もう少し高い所まで登れば何とかなるかもしれない、と考え、登っていくと、とうとう砂防ダムに行き当たる。ここから先はあまり道が整備されていないし、藪漕ぎをしようにも、(典型的な噴火の跡の二次植生と言っても良いだろう、) 密な竹藪に阻まれてなかなか先に進みづらい。そこで、その付近で思い思いに採集して、適当な時間になったところで打ち止めとしようか、ということで話がまとまった。中西さんは本当に黙々とシフティングを続けている。実に素晴らしい採集意欲で、頭が下がる。私はもう少し林内に行けば、リターが蓄積しているような所があるのではないかと思い、藪を漕いでみることにした。結論から言うと、竹が主たる構成員となっている林でそんなに良好な腐植が形成される訳がないわけだが、それはそれとして、竹の根元を抱く枯葉が、わりに良い越冬場所になるようで、少数ながらクモの採集には成功した。

終わってみれば採集の成果が多いとはとても言えない状況であったが、冬だから、ということで自分を誤魔化すことにする。元町港までの帰り道は、思い思いに採集や記録をしながらのんびりと歩いた。ざっと、スィーピング=原口 カメラマン=中西 タイムキーパー=中條 史跡記録=久保 という具合であった。

帰路

港に戻ると、船の出港まで若干時間も残りそうだったので、お土産を買っていくことにした。伊豆大島の名物と言えば、「くさや」である。ご存知の方も多いと思うが、くさやとは魚の内臓を塩漬け状態で発酵させたものに魚を漬け込んだ上で干した加工食品であり、当然独特の臭いがある。臭いを嫌う人も多いが、私の一家はくさや好きであるので、家を出る時点で「くさや買って来てね」と言われて送り出されている。買うしかあるまい。港近くのスーパー、「紅屋」(SUPER BENIYA とルビが振ってあった。断じて SUPER VENEER ではない…ちょっと分かりにくい駄洒落でしたか?) に行くと、鮮魚から鯖節まで、様々な魚類を販売している中に、勿論くさやも販売されていた。そして、よくよく見ると外見上ほ

とんど違いのないくさや、同じ製造元であるにもかかわらず、二通りのパッケージが陳列されている。両者の違いは、真空パックしてあるか否か、である。確かに、くさや特有の臭いの問題上、お持ち帰りには真空パックしてある方が望ましい。他方の商品は、あからさまにサランラップで包んであるだけである。しかし、しかしである。両者の値段は倍近く差があるのだ。貧乏学生としてはわざわざ高い方を買う必要もないし、そしてまた地元の人には安い方を買っているのだろうな、と考えたりした結果、安い方を手に取った。すると…手の平にじっとりとした感触が伝わってきた。明らかに漬け汁が漏れ出ている。購入を済ませてから手の臭いを嗅ぐと、見事にくさやの臭いになっていた。なかなか楽しい経験をさせて下さった某くさやメーカーさんにこの場を借りて御礼申し上げます。

紅屋をでると、すぐ近くに野菜の無人直売所があったので、ついでにそこも覗いていくことにした。気分は完全に「近所でお買い物」である。ここでもちょっとした笑いのネタが提供されていた。ほとんど1個100円という分かりやすくしてお安い価格設定の野菜達に混じって、「領収書発行します」の記述と共に連絡先の電話番号が…。誰がどこに対して100円単位の野菜の代金を請求するのだろうか。私は、こういった類の真面目な冗談が大好きだ。そういった意味では、旅の醍醐味を満喫できた小旅行であった。後になって中條氏から聞いたところでは、大島の採集記録も、ごく限られた地域のみにおけるものであり、冬季の採集という意味でもそれなりに意義のあるものだそう。という訳で、今回の採集は出だしこそ危ぶまれたものの、振り返ってみればなかなか実りある楽しいものになったと思う。次回こそ利島旅行を実現したい、という抱負も出来たことだし、まだまだ私のクモライフは終わりそうにない。

～帰路、元町港→竹芝の船内にて、葬式帰りの乗客に混じってこの紀行文を記す。購入したくさやの臭気が気になるので、そろそろ狸寝入りを決め込むとしようか…。～～

結



港にて記念撮影

(左から中西さん、中條氏、
筆者、久保氏)

大阪府のクモ

池田 勇介

夏休みの自由研究として今までにぼくが大阪府で採集した標本のリストを発表しましたので、ここに改めて大阪府のクモとして発表します。なお、「県別クモ類分布図 Ver. 2006」(新海他, 2006)で調べて、大阪府新記録種だと分かったものには、種名の最初に星マークをつけました。

一部の名前の分からないクモを同定して下さった加村隆英先生, 熊田憲一先生, 座古禎三先生, 谷川明男先生, 西川喜朗先生, どうもありがとうございました。

採集場所及び日付の一覧

- 大阪府藤井寺津堂城山, 採集日は複数あり : A
- 大阪府箕面市箕面公園, 2003年6月1日 : B
- 大阪府東大阪市枚岡公園, 2005年5月29日 : C
- 大阪府茨木市泉原, 2004年9月21日 : D
- 大阪府茨木市泉原, 2005年6月19日 : E
- 大阪府八尾市恩智中町恩智神社, 2005年11月3日 : F
- 大阪府八尾市恩智中町恩智神社, 2005年11月16日 : G
- 大阪府河内長野市光滝寺キャンプ場, 2006年3月19日 : H
- 大阪府河内長野市光滝寺キャンプ場, 2006年4月9日 : I
- 大阪府八尾市信貴山, 2003年10月19日 : J
- 大阪府八尾市教興寺, 2003年11月15日 : K
- 大阪府八尾市神宮寺 神宮寺公園, 2004年8月28日 : L
- 大阪府柏原市河内堅上, 2006年4月9日 : M
- 大阪府千早赤阪村金剛山, 2002年11月4日 : N
- 大阪府河内長野市関西サイクルスポーツセンター, 2003年5月5日 : O
- 大阪府八尾市恩智南町, 2005年7月29日 : P
- 大阪市中央区大阪城公園, 2006年6月11日 : Q
- 大阪市西区鞆公園 (うつぼこうえん), 2005年9月4日 : R
- 大阪府堺市浜寺公園, 2002年9月15日, 2003年11月16日 : S
- 大阪府箕面市箕面公園, 2003年9月21日 : T

以下のリストでは、採集場所・日付を上記のアルファベットで示した。ただし、「大阪府藤井寺津堂城山 : A」及び「大阪府堺市浜寺公園 : S」については、採集日が複数にわたるため、日付をリスト中に記した。

また, (F), (M) はそれぞれ雌及び雄の成体, (f), (m) はそれぞれ雌及び雄の幼体, (y) は雌雄の判別不可能な幼体を表す。数字は採集した個体数を表す。

クモリスト

Atypidae ジグモ科

Atypus karschi Dönitz 1887 ジグモ

(性別, 個体数不明) A(2000.8), (F)1 B, (y)2 C, (F)1 R

Calommata signata Karsch 1879 ワスレナグモ

(F)1 A(2000.8), (F?)1 Q

Ctenizidae トタテグモ科

Latouchia typica (Kishida 1913) キシノウエトタテグモ

(F)2 C, (F)1 Q

Conothele fragaria (Dönitz 1887) キノボリトタテグモ

(F)1 C

Pholcidae ユウレイグモ科

Pholcus crypticolens Bös. & Str. 1906 ユウレイグモ

(性別, 個体数不明) A(2000.8), (m)1 D, (M)1 C

Segestriidae エンマグモ科

Ariadna lateralis Karsch 1881 ミヤグモ

(F)2 M

Mimetidae センショウグモ科

Mimetus japonicum Uyemura 1938 ハラヒロセンショウグモ

(f)2 F, (m)2 G

Mimetus testaceus Yaginuma 1960 オオセンショウグモ

(y)1 M

Oecobiidae チリグモ科

Uroctea compactilis L.Koch 1878 ヒラタグモ

(性別, 個体数不明) A(2001.9.23), (f)1 C, (F)1 B

Urodoridae ウズグモ科

Hyptiotes affinis Bös. & Str. 1906 オウギグモ

(F)1 F

Miagrammopes orientalis Bös. & Str. 1906 マネキグモ

(性別, 個体数不明) A(2000.8), (F)1 C, (f)1 F

Octonoba sybotide (Bös. & Str. 1906) カタハリウズグモ

(f)1 D, (F)1 E, (F)1 B, (f)1 F, (F)1 J

Octonoba varians (Bös. & Str. 1906) ウズグモ

(F)3 C, (F)1 B

Theridiidae ヒメグモ科

Achaearanea angulithorax (Bös. & Str. 1906) ツリガネヒメグモ

(F)1 (M)2 C, (F)1 C, (F)1 T

Achaearanea culicivola (Bös. & Str. 1906) カグヤヒメグモ

(f)2 C, (f)1 F, (F)1 Q

Achaearanea ferrumequina (Bös. & Str. 1906) ヒザブトヒメグモ

(F)1 E

Achaearanea japonica (Bös. & Str. 1906) ニホンヒメグモ

(F)1 A(2002.8.31), (F)1 D, (F)1 J, (y)1 Q, (F)1 T

Achaearanea tabulata Levi 1980 オオツリガネヒメグモ

(F)1 C, (F)2 B

Parasteatoda tepidariorum (C. L. Koch 1841) オオヒメグモ

(性別, 個体数不明) A(2001.9), (F)1 (M)1 D, (F)1 E, (f)1 J, (F)1 Q, (f)1 S(2002.9.15)

Parasteatoda tepidariorum (C. L. Koch 1841) アシブトヒメグモ

(F)1 (m)1 C, (m)1 F, (f)1 J

Argyrodes bonadea (Karsch 1881) シロカネイソウロウグモ

(F)2 J, (F)1 T

Argyrodes cylindratus Thorell 1889 トビジロイソウロウグモ

(F)1 D

Argyrodes kumadai Chida & Tanikawa 1999 チリイソウロウグモ

(F)2 (f)1 B, (y)10 F

Ariamnes cylindrogaster (Simon 1888) オナガグモ

(f)1 D, (F)1 F, (f)2 J, (m)1 T

Chryso argyrodiformis (Yaginuma 1952) オダカグモ

(y)1 Q, (F)1 R

Chryso foliata (L.Koch 1878) ホシミドリヒメグモ

(F)1 (M)2 M, (f)2 T

Coleosoma octomaculatum (Bös. & Str. 1906) ヤホシサヤヒメグモ

(M)1 Q

Dipoena punctisparsa Yaginuma 1967 シモフリミジングモ

(F)1 B

Enoplognatha abrupta (Karsch 1879) カレハヒメグモ

(F)6 C, (f)2 D, (F)2 B, (M)1 F, (f)1 G

Keijia sterninotata (Bös. & Str. 1906) ムナボシヒメグモ

(f)1 F, (y)2 T

Neospintharus fur (Bös. & Str. 1906) フタオイソウロウグモ

(M)1 E, (f)1 (m)1 F, (m)1 G

Phycosoma mustelinum (Simon 1888) カニミジグモ

(M)2 C, (F)1 (m)1 F, (M)1 J, (M)2 T

Rhomphaea sagana (Dön. & Str. 1906) ヤリグモ

(f)1 (m)1 G

Steatoda cingulata (Thorell 1890) ハンゲツオスナキグモ

(性別, 個体数不明) A(2000.8.29), (F)1 C, (f)1 S(2002.9.15)

Stemmops nipponicus Yaginuma 1969 スネグロオチバヒメグモ

(M)1 Q

Takayus chikunii (Yaginuma 1960) バラギヒメグモ

(F)1 E, (y)1 F, (f)1 G

Takayus subadultus (Bös. & Str. 1906) コケヒメグモ

(y)1 N

Takayus yunohamensis (Bös. & Str. 1906) ユノハマヒメグモ

(F)1 I

Theridion pinastri L. Koch 1872 ムネグロヒメグモ

(F)2 (M)1 Q

Latrodectus hasselti Thorell 1870 セアカゴケグモ

(F)1 K, (F)1 L, (F)15 (f)6 (M)3 S(2002.9.15), (F)20 (f)7 (M)6 S(2003.11.16)

☆*Spheropistha melanosoma* Yaginuma 1957 クロマルイソウロウグモ

(F)1 E

Achaearanea oculiprominentis (S. Saito 1939) キヨヒメグモ

(F)1 A(2001.9.23)

Episimus nubilus Yaginuma 1960 ムラクモヒシガタグモ

(F)1 T

Theridiosomatidae カラカラグモ科

Theridiosoma epeiroides Bös. & Str. 1906 カラカラグモ

(y)1 F

ナルコグモ

(M)1 I

Anapidae ヨリメグモ科

Conculus lyugadinus Komatsu 1940 ヨリメグモ

(F)1 I

Mysmenidae コツブグモ科

Mysmenella jobi (Kraus 1967) ナンブコツブグモ

(F)1 F

Pimoidae ピモサラグモ科

Weintrauboa contortipes (Karsch 1881) アシヨレグモ

(F)1 C, (F)1 D, (F)4 F, (M)1 G, (F)1 J

Linyphiidae サラグモ科

☆*Arcuphantes osugiensis* (Oi 1960) オオスギヤミサラグモ

(F)3 H

Diplocephaloides saganus (Bös. & Str. 1906) ハラジロムナキグモ

(F)3 Q

Doenitzius privus Oi 1960 コデーニッツサラグモ

(F)1 M

Erigone prominens Bös. & Str. 1906 ノコギリヒザグモ

(F)1 Q

Nematogmus sanguinolentus (Walckenaer 1837) チビアカサラグモ

(M)2 E

Nerienne japonica (Oi 1960) ツリサラグモ

(F)2 B

Nerienne nigripectoris (Oi 1960) ムネグロサラグモ

(F)1 C, (F)1 E

Ostearius melanopygius (O. P.-Cambridge 1879) スソグロサラグモ

(F)2 C

Turinyphia yunohamensi (Bös. & Str. 1906) ユノハマサラグモ

(F)1 J, (F)1 T

Nerienne longipedella (Bös. & Str. 1906) アシナガサラグモ

(F)1 C

Nerienne oidedicata (Helsdingen 1969) ヘリジロサラグモ

(F)1 D

Tetragnathidae アシナガグモ科

☆*Diphya okumae* Tanikawa 1995 オオクマヒメドヨウグモ

(M)1 B

Leucauge blanda (L. Koch 1878) チュウガタシロカネグモ

(F)1 Q

Leucauge magnifica Yaginuma 1954 オオシロカネグモ

(F)2 (M)1 C, (F)1 F

Leucauge subblanda Bös. & Str. 1906 コシロカネグモ

(f)1 E

Meta reticuloides Yaginuma 1958 ヤマジドヨウグモ

(F)1 J

Metleucauge kompirensis (Bös. & Str. 1906) タニマノドヨウグモ

(f)1 F, (M)1 O

Metleucauge yunohamensis (Bös. & Str. 1906) メガネドヨウグモ

(F)1 O

Tetragnatha maxillosa Thorell 1895 ヤサガタアシナガグモ

(F)1 C, (F)1 E, (F)1 I

Tetragnatha nitens (Audouin 1827) ヒカリアシナガグモ

(F)2 P

Tetragnatha praedonia L. Koch 1878 アシナガグモ

(F)1 C, (F)1 D, (M)1 B

Tetragnatha squamata Karsch 1879 ウロコアシナガグモ

(f)2 D, (F)1 (M)1 D

Tetragnatha extensa (Linnaeus 1758) ハラビロアシナガグモ

(F)1 F

Nephilidae ジョロウグモ科

Nephila clavata L. Koch 1878 ジョロウグモ

(f)1 C, (F)2 (M)1 F, (F) J, (M)1 T

Araneidae コガネグモ科

Acusilas coccineus Simon 1895 ハツリグモ

(性別, 個体数不明) A(2001.9), (f)1 C, (f)1 D, (F)1 B, (m)1 G, (f)1 J,
(f)1 J, (f)2 T

☆*Araneus acusisetus* Zhu & Song 1994 オオクマヤミイロオニグモ

(F)1 O

Araneus ejusmodi (Bös. & Str. 1906) ヌサオニグモ

(F)1 E

Araneus ishisawai Kishida 1928 イシサワオニグモ

(F)1 N

Araneus mitificus (Simon 1886) ビジョオニグモ

(F)1 A(2001.9.23)

Araneus pentagrammicus (Karsch 1879) アオオニグモ

(F)1 F, (f)1 G, (f)1 J

Araneus semilunaris (Karsch 1879) マルヅメオニグモ

- (y)1 I
Araneus ventricosus (L. Koch 1878) オニグモ
(F)1 A(2002.8), (y)1 Q
Araniella yaginumai Tanikawa 1995 ムツボシオニグモ
(M)1 O
Argiope bruennichi (Scopoli 1772) ナガコガネグモ
(性別, 個体数不明) A(2002.8)
Chorizopes nipponicus Yaginuma 1963 ヤマトカナエグモ
(y)1 N
Cyclosa argenteoalba Bös. & Str. 1906 ギンメッキゴミグモ
(性別, 個体数不明) A(2000.8.29), (f)1 C, (F)1 B, (f)1 F, (m)1 S
(2003.11.16), (F)1 (M)1 T
Cyclosa ginnaga Yaginuma 1959 ギンナガゴミグモ
(F)1 J
Cyclosa japonica Bös. & Str. 1906 ヤマトゴミグモ
(F)1 O
Cyclosa octotuberculata Karsch 1879 ゴミグモ
(性別, 個体数不明) A(2000.7), (F)1 (M)1 C, (f)1 F, (F)1 B, (f)1 F, (f)1
T
Cyclosa omonaga Tanikawa 1992 シマゴミグモ
(性別, 個体数不明) A(2001.9), (f)1 C, (F)1 B, (F)1 Q
Cyclosa sedeculata Karsch 1879 ヨツデゴミグモ
(F)1 (M)1 C, (m)3 F, (f)1 J
Cyclosa vallata Keyserling 1886 マルゴミグモ
(F)1 S(2002.9.15), (F)1 S(2003.11.16)
Cyrtarachne nagasakiensis Strand 1918 シロオビトリノフンダマシ
(F)1 A(1999.9)
Eriophora astridae (Strand 1917) サガオニグモ
(f)1 C, (M)1 I, (f)2 J, (F)1 O
Eriophora sachalinensis (S. Saito 1934) カラフトオニグモ
(f)3 T
Neoscona nautica (L. Koch 1875) イエオニグモ
(f)1 D
Neoscona scylla (Karsch 1879) ヤマシロオニグモ
(f) C, (m)1 E, (y)1 Q
Neoscona subpullata (Bös. & Str. 1906) ヘリジロオニグモ

(f)1 D

Ordgarius sexspinosus (Thorell 1894) ムツトゲイセキグモ

(F)5 U

Pronous minutus (ShenKel 1936) コオニグモモドキ

(y)1 H

Yaginumia sia (Strand 1906) ズグロオニグモ

(性別, 個体数不明) A(2000.7), (M)1 M

Cyrtophora moluccensis (Doleschall 1857) スズミグモ

(y)1 C(飼育中に脱走)

Hypsosinga sanguinea (C. L. Koch 1844) シロスジシヨウジョウグモ

(f)1 H

☆*Araneus macacus* Uyemura 1961 ヤエンオニグモ

(f)1 N

Lycosidae コモリグモ科

Alopecosa moriutii Tanaka 1985 ハタチコモリグモ

(F)1 D

Lycosa coelestis L. Koch 1878 ハラクロコモリグモ

(性別, 個体数不明) A(1999.11), (F)1 E, (F)1 S(2002.9.15)

Pardosa astrigera L. Koch 1878 ウツキコモリグモ

(f)1 D, (F)1 S(2003.11.16)

Pardosa brevivulva Tanaka 1975 ヤマハリゲコモリグモ

(F)1 (M)1 I

Pardosa laura Karsch 1879 ハリゲコモリグモ

(F)1 E

Pisauridae キシダグモ科

Dolomedes saganus Bös. & Str. 1906 スジアカハシリグモ

(y)1 N

Dolomedes sulfureus L. Koch 1878 イオウイロハシリグモ

(f)1 J

Oxyopidae ササグモ科

Oxyopes sertatus L. Koch 1878 ササグモ

(F)2 (M)3 C, (F)1 E, (y)1 F, (f)1 J

Agelenidae タナグモ科

Agelena silvatica Oliger 1983 クサグモ

(性別, 個体数不明) A(2000.8), (f)4 C, (f)2 B, (F)1 S(2002.9.15)

Allagelena opulenta (L. Koch 1878) コクサグモ

(F)1 C, (f)1 D, (F)1 F

Cybaeidae ナミハグモ科

Cybaeus nipponicus (Uyemura 1938) カチドキナミハグモ

(F)1

Desidae ウシオグモ科

Badumna insignis (L.Koch 1872) クロガケジグモ

(M)1 C, (F)1 F, (F)1 S (2002.9.15), (m)1 S (2003.11.16)

Dictynidae ハグモ科

Dictyna felis Bös. & Str. 1906 ネコハグモ

(F)1 D, (F)1 B, (F)1 (f)1 F

Dictyna foliicola Bös. & Str. 1906 ヒナハグモ

(f)1 (M)1 Q

Lathys maculosa (Karsch 1879) ヤマトカレハグモ

(M)1 Q

Lathys sexoculata Seo & Sohn 1984 ムツメカレハグモ

(m)1 Q

Amaurobiidae ガケジグモ科

Asiacoelotes insidiosus (L. Koch 1878) シモフリヤチグモ

(性別, 個体数不明) A(1999.11), (M)1 I, (f)1 J, (F)1 S(2002.9.15)

Coelotes antri (Komatsu 1961) ホラズミヤチグモ

(F)1 I

Coelotes yaginumai Nishikawa 1972 カミガタヤチグモ

(F)1 I

Paracoelotes luctuosus (L. Koch 1878) メガネヤチグモ

(F)1 A(2000.4)

Titanoecidae ヤマトガケジグモ科

Nurscia albofasciata Strand 1907 ヤマトガケジグモ

(F)1 M

Anyphaenidae イヅツグモ科

Anyphaena pugil Karsch 1879 イヅツグモ

(F)1 H

Liocranidae ウエムラグモ科

Itatsina praticola (Bös. & Str. 1906) イタチグモ

(F)2 C, (F)1 S(2002.9.15), (f)1 T

Clubionidae フクログモ科

Clubiona vigil Karsch 1879 ムナアカフクログモ

(M)1 Q

Corinnidae ネコグモ科

Otacilia komurai (Yaginuma 1952) コムラウラシマグモ

(F)1 J

Trachelas japonicus Bös. & Str. 1906 ネコグモ

(M)1 M

Gnaphosidae ワシグモ科

Drassodes serratidens Schenkel 1963 トラフワシグモ

(F)1 A (2002.8.31)

Zelotes asiaticus (Bös. & Str. 1906) クロチャケムリグモ

(F)1 B

Sparassidae アシダカグモ科

Sinopoda forcipata (Karsch 1881) コアシダカグモ

(F)1 C

Philodromidae エビグモ科

☆*Philodromus aureolus* (Clerck 1758) コガネエビグモ

(F)2 (M)3 Q

Philodromus auricomus L. Koch 1878 キンイロエビグモ

(f)2 (M)2 C, (F)1 (M)1 E, (F)1 J, (f)1 T

Philodromus spinitarsis Simon 1895 キハダエビグモ

(F)1 S (2002.9.15), (F)1 S (2003.11.16)

Tibellus tenellus (L. Koch 1876) シャコグモ

(m)1 C, (f)1 D, (f)1 T

Thomisidae カニグモ科

Bassaniana decorata (Karsch 1879) キハダカニグモ

(f)1 C, (M)1 Q

Diaea subdola O. P.-Cambridge 1885 コハナグモ

(F)2 (M)1 C, (F)1 E

Ebelingia kumadai (Ono 1985) クマダハナグモ

(f)1 (m)1 D, (y)1 F, (f)1 G, (M)5 J

Ebrechtella tricuspadata (Fabricius 1775) ハナグモ

(f)2 J

Heriaeus melloteei Simon 1886 アシナガカニグモ

(y)1 M

Oxytate striatipes L. Koch 1878 ワカバグモ

(f)1 D, (y)1 E, (f)1 J

Pistius undulatus Karsch 1879 ガザミグモ

(f)1

Tmarus piger (Walckenaer 1802) トラフカニグモ

(F)1 E

Tmarus rimosus Paik 1973 セマルトラフカニグモ

(M)1 Q, (m)1 J

Xysticus croceus Fox 1937 ヤミイロカニグモ

(f)1 (M)2 J

Xysticus ephippiatus Simon 1880 カラカニグモ

(F)1 Q

Salticidae ハエトリグモ科

Evarcha albaria (L. Koch 1878) マミジロハエトリ

(F)1 C, (F)1 D, (F)1 (f)2 (M)1 I, (F)1 O

Harmochirus insulanus (Kishida 1914) ウデブトハエトリ

(M)1 O

Hasarius adansoni (Audouin 1897) アダンソンハエトリ

(F)1 S (2002.9.15), (F)1 S (2003.11.16)

Marpissa pulla (Karsch 1879) ヨダンハエトリ

(y)1 F

Myrmarachne inermichelis Bös. & Str. 1906 ヤサアリグモ

(f)1 C, (f)1 E, (f)1 T

Myrmarachne japonica (Karsch 1879) アリグモ

(f)1 (m)1 C, (f)1 E, (F)1 B, (M)1 J

Pancorius crassipes (Karsch 1881) アシブトハエトリ

(F)1 M, (f)2 T

Rhene atrata (Karsch 1881) カラスハエトリ

(f)1 J

Plexippoides doenitzi (Karsch 1879) デーニッツハエトリ

(f)2 C, (F)1 D, (M)1 I, (F)1 J, (f)1 T

Plexippus setipes Karsch 1879 ミスジハエトリ

(F)1 (f)1 S (2002.9.15)

Yaginumanis sexdentatus (Yaginuma 1967) ムツバハエトリ

(F)1 H

参考文献

新海明・安藤昭久・谷川明男, 2006. 県別クモ類分布図 Ver. 2006 (CD版).

前回記事の訂正及び僕が大阪府内で確認したセアカゴケグモ採集記録

池田 勇介

前回僕が発表しました「セアカゴケグモに咬まれて」に間違いがありましたのでここで訂正します。咬まれた日を2004年11月9日としましたが、咬まれた日は19日であることが分かりました。したがって、写真の撮影日も20日になります。どうもすみませんでした。

僕が大阪で採取したセアカゴケグモのデータ

- 大阪府八尾市教興寺, 2003年11月15日, (f)1, 池田勇介 leg.
大阪府八尾市神宮寺5丁目神宮寺公園, 2004年8月28日, (F)1, 池田勇介 leg.
大阪府八尾市八尾空港周辺, 2004年10月31日, (F)5 (y)3, 池田勇介 leg.
大阪府八尾市志紀町西一丁目志紀図書館周辺, 2005年4月1日, (f)1, 池田勇介 leg.
大阪府八尾市恩智北町3丁目南高安小学校, 2005年10月2日, (f)1, 池田勇介 leg.
大阪府八尾市恩智北町3丁目南高安中学校, 2005年10月9日, (F)1, 池田勇介 leg.
大阪府八尾市恩智天王ノ森, 2005年11月16日, (F)1, 池田勇介 leg.
大阪府八尾市恩智中町大畑山アクトランド, 2005年11月16日, (f)1, 池田勇介 leg.
大阪府柏原市安堂町リビエールホール前の大和川, 2004年11月19日, (F)8 (y)7, 池田勇介 leg.
大阪市東住吉区長居公園, 2005年8月25日, (M)1 (F)6 (y)7, 池田勇介 leg.
大阪府富田林市錦織公園, 2005年4月9日, (F)1, 池田勇介 leg.
大阪府河内長野市関西サイクルスポーツセンター, 2006年10月9日, (F)1, 池田勇介 leg.
大阪府泉佐野市新町2丁目青空市場, 2006年6月11日, (F)1, 池田勇介 leg.

最後になりましたが、日付の誤りを指摘していただき、貴重なアドバイスを頂いた清水裕行先生、どうもありがとうございました。

関西クモ研究会 2006 年度会計報告

収入：	2005 年度からの繰越金	176,242	
	会費過年度分入金	7,000	
	会費 2006 年度分入金	21,000	
	会費 2006 年度前受け分繰り入れ	40,000	
	バックナンバー売り上げ	6,500	
	寄付	1,000	
	懇親会残金	3,670	
<hr/>			
合計		255,412	
<hr/>			
支出：	くものいと No. 39	表紙用紙	1,200
	同上	印刷費	28,000
	同上	裁断料	1,800
	同上	郵送用封筒	840
	同上	郵送費	16,340
	採集会・例会の案内はがき郵送費		11,650
	その他の郵送費		1,760
	2007 年度への繰越		193,822
<hr/>			
合計			255,412

会費前受け状況 2006 年度末における会費前受け分の合計は、62,000 円である。その内訳は次のとおり。2007 年度分、38,000 円；2008 年度分、14,000 円；2009 年度分、6,000 円；2010 年度分、3,000 円；2011 年度分、1,000 円。

寄付拝受 会員の小川光昭氏から寄付として 1,000 円を頂戴いたしました。厚くお礼申し上げます。

上記のとおり、報告します。

会計担当 加村隆英

【会計監査報告】

会計に関する書類を監査した結果、正確に処理されていることを認めます。

2007 年 4 月 7 日 会計監査 田中穂積

編集後記

39号の発行は昨年9月だったので、久しぶりの「くものいと」の発行である。忙しさにかまけて、発行が延び延びになってしまったことに深くお詫び申し上げます。今回の編集では、原口岳さんに全面的に依存してしまった。厚く御礼を申し上げたいと思う。

久しぶりの「くものいと」ではあるが、40号は、徳本さんの大作をはじめとして、充実したものになった。このような内容とボリュームで年2回の発行を目指したいと思っているので、皆さん、ご協力を切に願います。

2007年6月22日

吉田 真

<関西クモ研究会> 会長 田中穂積
編集 吉田 真
庶務 山野忠清
会計・名簿管理 加村隆英
会計監査 船曳和代
顧問 西川喜朗

くものいと 40号

発行 2007年 6月 23日

関西クモ研究会 (代表: 田中 穂積)

事務局 (担当: 加村 隆英)

567-8502 大阪府茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学 生物学研究室

E-mail kamura@res.otemon.ac.jp